

# Two Byzantine Aristocratic Rebellions in the Middle of 11th Century

|       |                                                                                             |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2017-10-03<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者:<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/2297/23814">http://hdl.handle.net/2297/23814</a>             |

# ビザンツ貴族反乱の東と西

—11世紀中葉の事例から—

根津 由喜夫

## I はじめに

11世紀の半ば、ちょうど10年の時を隔てて、ビザンツ帝国の東西の属州を起点として2つの大規模な反乱が発生した。1047年、ビザンツ領バルカンの軍事的要衝であるアドリアノーブルで兵を挙げた反乱軍はレオン・トルニキオスに率いられて首都コンスタンティノーブルに迫り、次いで1057年に小アジアで挙兵したイサキオス・コムネノスの反乱軍は、ときの皇帝ミカエル6世の差し向けた追討軍を撃破して都に入り、ミカエル帝を退位させて権力の奪取に成功した。

これら一連の反乱は、かつては、国政の実権を握り、属州軍の解体を図る首都の文官派政権に対する属州の軍人貴族の不満と反発を示すもの、と見る解釈が一般的だった<sup>1</sup>。近年では、そうしたいささか単純な文武対立史観は成り立ち難いことが広く認識されるに至ってはいるが、それでも、これらの反乱が11世紀ビザンツの政治的混乱を象徴する出来事であったことは疑問の余地はないだろう。

長いビザンツ帝国の歴史では、宮廷陰謀や地方での反乱騒ぎは日常茶飯事であったのは事実である。しかし、大規模な軍事反乱に限って言えば、反乱軍が首都の前面に迫る事態に至ったのは、987年のバルダス・フォーカスの反乱以来だったから、半世紀以上時を隔てた60年ぶりのことであり、また、そうした軍の先頭に立った将軍が成功裏に都に入って権力を掌握したのは、前記バルダスの伯父ニケフォロス・フォーカスが963年に成功して以来だから、イサキオス・コムネノスはそれを90余年ぶりに達成したことになる。

ところが、11世紀の後半に入ると、この種の反乱はにわかに数を増し、次第にその頻度を高めていった。各地で続発する反乱の鎮定に奔走する軍司令官時代のアレクシオス・コムネノスの活躍を語る史家アンナ・コムネナは、彼女の父親の奮闘ぶりを、次々と課される試練を克服して怪物をねじ伏せたギリシア神話の英雄ヘラクレスに擬えているほどである<sup>2</sup>。

そうした意味において、ここで取り上げる2つの反乱は、11世紀後半の内乱の時代の開幕を告げる重要な画期となったと言えるだろう。多くの識者も、これらの事件の重要性は認識しており、ケマーやシェネなどの11世紀のビザンツ政治過程と貴族門閥の権力闘争を包括的に論じた研究では、両者が詳論されているし、筆者自身も過去に複数の論文でこれに関して分析を行っている<sup>3</sup>。今回、これらの反乱を改めて論じるのは、これらの先行研究に重大な修正を加えることが目的ではない。以下の本

稿では、印章学資料から得られた若干のデータを除けば、特に目新しい知見が加わるわけではないことを予めお断りしておかねばならない。

本稿の目的は、11世紀後半の政治過程を考察するに当たり、そのスタート地点となる時期に、比較的短期間に帝国の東西属州で勃発した2つの貴族反乱を相互に比較、検証することで、それぞれの特徴を明確にすることにある。それらは、地縁的な絆で結ばれた貴族たちが彼らの本拠で挙兵して都に進軍する、という点でも共通する外観を呈していた<sup>4</sup>。ところがバルカンで挙兵した反乱は失敗に終わり、小アジアのそれは首尾よく権力奪取に成功する。彼我の運命を分けたものは何か。それは、彼らの拠って立つ勢力基盤や地域社会の相違を反映しているのだろうか。あるいは何か別の要因がそこに介在しているのだろうか。

こうした問いに答えようという試みは、一面において、反乱という極限状態を分析対象として、バルカンと小アジア、という2つの地域社会の形質の相違を浮き彫りにすることとも言えるかもしれない。反乱のように現地社会を激しく揺さぶる事件が勃発すると、平常な時期には感知されることのなかった社会のひずみや矛盾が増幅され、大きくクローズアップされる事態が起こることはよく知られているところであろう。ただし、そこで参照すべき同時代の歴史叙述史料は、大多数が首都の文人や官僚の筆によるものであることも忘れてはなるまい。彼らは必ずしも反乱軍の本拠地の事情に通じていたわけではなかっただろうから、そうした記述に全面的に依存することは常に危険が付きまとうことも銘記すべきである。しかし、この点に関しても、我々が本稿で考察の対象とする時代には、幸いにして、ミカエル・プセルロス、ミカエル・アッタレイアテス、ヨハネス・スキュリツェスという相互に独立した3人の史家の叙述が現存しており、それらを併読し、比較、検証してゆくことで、首都の文人層の目というフィルターを通してであるが、反乱の全体像を復元することはかなりの程度まで可能になると思われるのである<sup>5</sup>。

以下ではまず、2つの反乱を比較する前提として、反乱に至る過程と反乱参加者の構成を明らかにし、その後、両反乱の実際の展開の推移を通覧しながらそれぞれの特徴を検証することにした。また、後で見るように、首都の政治勢力の動向は、反乱の成否に多大な影響をもたらしたことが窺えるため、この点については別途、後段でやや詳しく論じることになるであろう。

## Ⅱ 反逆者たちの群れ

言うまでもなく、皇帝に反逆することは大罪である。そうした嫌疑をかけられれば、最も幸運な場合でも、公的世界を退いて修道院への逼塞を強いられるのが常であり、実際に武装蜂起に及べば、もはや謀反の首謀者には、反乱に成功して最高権力を掌握するか、賭けに敗れて眼球を抉られて無残な

晩年を送るか、2つの可能性しか残されていなかった。しかも、11世紀後半の在地有力者ケカウメノスの「コンスタンティノープルにいる皇帝は常に勝つ」という発言<sup>6</sup>が同時代人に広く共有されていた認識だったとしたら、なぜ、今回の反乱の首謀者たちは、そうした危険の中にあえて跳びこもうとしたかが問われることになるだろう。彼らには、自分たちの計画の成功を確信する理由があったのだろうか。それとも、窮鼠猫を囓むごとく、反逆に立ちあがる以外に策がないほど追いつめられていたのだろうか。以下では、レオン・トルニキオスとイサキオス・コムネノス、2つの反乱において、彼らが挙兵するに至ったプロセスを追いつつ、彼らを反乱に駆り立てた要因を探ることにしたい。そして、謀反の中心メンバーはいかにして集まり、いかなる利害、いかなる絆で相互に結ばれてこの冒険に乗り出すに至ったのか、を考察したい。さらには、反逆者の指導的集団の中から、なぜレオン・トルニキオスとイサキオス・コムネノスがそれぞれ全軍の大將として対立皇帝に選ばれたのか、という問いにも答えを求めることにしよう。

最後の問題については、イサキオス・コムネノスの反乱に関して、彼の家産組織(所領と家兵)の強力が決め手となったことを説く井上浩一氏の所説<sup>7</sup>がすでに提示されているが、以下では筆者の独自の見解が提示されることになるだろう。

#### (1) レオン・トルニキオスとマケドニア派

「邪悪なる者(=悪魔)は、善なる人々に対して常に新たな戦いを仕掛けるのが流儀であり、それは以下のような名分でなされた。」

これは、史家ミカエル・アッタレイアテスがレオン・トルニキオスの反乱を報じた際にその冒頭に置いた一文である<sup>8</sup>。彼によれば、反乱の発生はまさしく悪魔の所業であり、その限りにおいて、人々の意志や思惑はここでは思考の外にあるかのようである。

スキュリツェスも、反乱に至る過程は素っ気なく、イベリアで將軍職を務めていたトルニキオスが謀反を疑われて職を解かれ、修道士になることを強いられたこと、それに反発した彼が故郷のアドリアノーブルで現地の軍を味方につけて挙兵したことを語るにすぎない<sup>9</sup>。一見すると、そこで問題となっているのは、皇帝の不当な処遇を不満としたトルニキオスの私怨のように思われるが、その場合には、なぜアドリアノーブル駐屯の軍隊が、こうした私的な復讐劇に大々的に加担したのか、が理解できず、もどかしい思いは禁じえない。

これに対して、プセルロスの記述は、前2者が触れていない宮廷内のスキャンダルにも言及して、事件の背景をより深く掘り下げようとしている<sup>10</sup>。彼が語るところによれば、反乱の発端は、皇帝コンスタンティノス9世が、姉妹エウプレピアがトルニキオスに好意的なのを嫌って、後者を東方辺境

の軍司令官に左遷し、さらにはトルニキオスの故郷の軍の不祥事を口実に、彼を修道士になるよう強要したことにあった。こうした仕打ちに対して、トルニキオスは、首都周辺に出入りするマケドニア人の一党の手引きで故郷のアドリアノーブルへ落ちのび、現地で支持者を集めて挙兵に至ったのだという。ここでは、皇帝とトルニキオスとの間の感情的な対立の経緯が明らかになっているが、依然として、アドリアノーブルの軍勢が即座に彼に呼応したことについては十分に説明がなされているわけではない。この点に関しプセルロスは、トルニキオスを手引きしたマケドニア人たちはこの機会を「ずっと求めてきた反乱の好機と認識した」からだ、と説明しているが、これは「反乱したのは、反乱がしたかったからだ」と言っているのに等しく、ほとんど無意味な言説という他ない<sup>11</sup>。

アドリアノーブル駐屯軍が大挙して反乱に決起した要因に関しては、ジャン・ルフォールが、1047年に起草されたヨハネス・マウロプスの3篇の演説原稿を読み解くことで説得的な議論を展開している<sup>12</sup>。その所説の骨子は、1047年初頭にドナウ川を越えて帝国領に侵攻したペチェネグ人の大軍が、疫病で多大な犠牲者が出たこともあり、ビザンツに降伏したこと、その結果、彼らの多くがブルガリアの各地に入植させられたこと、そして、ペチェネグ人の脅威の減退と彼らの軍隊編入という二重の要因に基づき、バルカン駐留軍の一部の除隊措置が進められた結果、解雇された将兵は不満を募らせ、それがトルニキオス反乱の直接的な契機となったこと、である。この図式に従えば、今回の反乱の根底には、ビザンツ西方軍の内部に鬱積した広範な不満があったのであり、皇帝によるトルニキオスの放逐は、そうした不満派将兵に挙兵の契機を与えるものに過ぎなかったことになる。

では、トルニキオス担ぎ出しに主導的な役割を果たした者とは誰か。

遺憾なことに、どの史書にも反乱の冒頭でそれを主導した人々の名前は明示されていない。スキュリツェスによれば、トルニキオスは「まず、退役させられ、無為をかこっていた将軍たちを秘かに少しずつ配下にしていった。そして彼らや自分の親族を介してマケドニアやトラキアのタグマタを指揮していた人々を籠絡させたのである」と語っている<sup>13</sup>から、叛徒の結集には2つの段階があり、まず、ルフォールも指摘した、退役を強いられ不満を高じさせた軍人たちがトルニキオスの親族と共に陰謀集団の中核を成し、次いで、それに現役の軍指揮官たちが巻き込まれていった、という図式を想定することができるだろう。その際には、プセルロスが語るように、皇帝コンスタンティノス9世が没し、それを受けて女帝テオドラがトルニキオスを共同皇帝に指名した、という偽情報を広く流布させるような姦計<sup>14</sup>も駆使されたことも考えられる。

反乱の謀議に当初から加わっていたメンバーかどうかは判然としないが、少なくとも挙兵後はトルニキオスを支えた有力支持者4名の名前がスキュリツェスによって報じられている。それを史家の記述順に列挙すれば、ヨハネス・ヴァタツェス、テオドロス・ストラボミュテス、ポリュス、マリアノ

ス・ブラナス、となる<sup>15</sup>。このうち、後の3人はトルニキオスと血縁関係があったことを同じ個所でスキュリツェスが明示しているし、ヴァタツェスもトルニキオスと縁戚関係にあったことはアッタレイアテスの記事から確認できる<sup>16</sup>。ストラボミュテス以下の3名は西方のタグマタを指揮していたことが現在形で報じられているので、スキュリツェスの記述に信をおけば、反乱勃発当時、現職の軍指揮官であり、謀議の第2段階においてトルニキオスとの血縁関係も作用して叛徒の仲間に加わったのだと推定することもできるだろう。一方、ヴァタツェスは当初からの陰謀の中心メンバーであったと考えれば、後述するような反乱終盤の彼らの身の振り方の違いも説明がつくように思われる<sup>17</sup>。

上記4人の軍人の正確な爵位や官職について、叙述史料はほとんど有効な情報を提供してくれないが、ストラボミュテス以外の3名に関しては、幸いにして印章資料から、そうした空白の一部を埋める情報を得ることが可能である。

まず、同定が比較的容易なものから紹介してゆくと、マリアノス・ブラナスについては「プロートスパタリオス、ヒュパトスかつストラテゴス」という称号を帯びた印章がG.シュランベルジェとW.ザイプトによって報じられている<sup>18</sup>。

次にポリュスに関してだが、最近、ブルガリアのビザンツ印章学研究者、I.ヨルダノフによって「パトリキオスかつストラテゴス」の称号を帯びた「アナスタシオス・ポリュス」という人物の印章が公刊されている<sup>19</sup>。現在知られている限りでは、ポリュスという苗字を名乗る人物は、今回の反乱参加者が唯一の存在だから、印章のアナスタシオスがそれと同一人物である公算は極めて高いと考えられる。ここにおいて、我々は叙述史料では語られることのなかったポリュスの個人名を知ることになったのである。

最後のヨハネス・ヴァタツェスについては、やや面倒な同定の問題が提起されねばならない。その名を刻印した同時期の印章は、複数、現存しており、それらが同一人物に帰属するのか、あるいは今回の反乱参加者とそれらはどう関係づけられるのか、に関しては、慎重な考察が求められるからである。11世紀中葉から同後半の時期に属すと年代画定されている「ヨハネス・ヴァタツェス」の印章としては、シュランベルジェが紹介している2種のそれ、すなわち称号部分の判読が困難なものと「プロートスパタリオスかつストラテゴス」の称号を帯びたそれ、ヨルダノフが公刊した「ヴェステス」の爵位を帯びた印章、さらにギランやバルネアが報じる「クロパラテス」や「ノベリシモス」の爵位を帯びたそれ、が知られている<sup>20</sup>。

これらのうち、「クロパラテス」や「ノベリシモス」の爵位を帯びた印章は、11世紀中葉当時では、皇族に相当する極めて高位の称号だったから、今回の反乱者とは別人に帰することはほぼ間違いないところだろう。問題は残りの3つの印章の関係である。

J.ラングドン<sup>21</sup>は、シュランベルジェの公刊した2種の印章をいずれも今回の反乱者に帰属するものである、と想定した上で、判読が困難な一方の印章の文面を「トボテレーヌ」(タグマ軍の副官)と読解し、ヨハネス・ヴァタツェス<sup>22</sup>がその地位から前述の「プロトスパタリオスかつストラテegos」へと昇任したことを推測している<sup>21</sup>。

仮にこの2つが今回の反乱者に帰属するとしたら、ヨルダノフが報じる「ヴェステス」称号の持ち主との関係が次の焦点となる。この点に関しては、決定的な論証は困難だが、印章の表側に刻まれた図像が手掛かりになるだろう。「プロトスパタリオスかつストラテegos」のヨハネス・ヴァタツェスの印章には聖ゲオルギオスの肖像が刻まれていたのに対し、同名の「ヴェステス」の印章に刻まれていたのは洗礼者ヨハネの肖像であった<sup>22</sup>。この時期、キャリアの途中で個人の印章に刻まれる聖人の図像が変更される事例は皆無ではない<sup>23</sup>とはいえ、こうした意匠の相違は2つの印章の持ち主が同名異人である公算を高めているのではないだろうか。

以上の考察を踏まえれば、トルニキオス反乱の有力な支持者たちの相貌が多少とも明らかになるだろう。彼らの爵位はポリュスの帯びるパトリキオス位を最高に、プロトスパタリオス、ヒュパトスといった中位の位階が主であり、地方駐屯軍の指揮官層にまさしく相当していることが確認される<sup>24</sup>。そしてさらに、そこから、レオン・トルニキオスが彼らの総大将として擁立された理由も推しはかることができるだろう。というのも、アッタレイアテスによれば、反乱以前にトルニキオスはパトリキオスかつヴェステスの位に昇っており<sup>25</sup>、皇帝と縁戚関係にある点でも、西方軍の幹部クラスよりも頭ひとつ秀でた地位にあったことが想定されるからである<sup>26</sup>。家門の古さにおいてもトルニキオス家は彼らを圧倒しており、この時期、次第にビザンツ社会でも顕在化してきた「高貴な家系」という意識に適合する形質を備えていた<sup>27</sup>。その意味で、反乱の支持者たちが口の達者な者たちを駆使し、将兵たちに、女帝テオドラが「万人に勝って賢明で活力に満ち、高貴な出自において輝かしい門地を誇る」レオン・トルニキオスを皇帝に選んだ、とふれまわらせた、というプセルロスの記述<sup>28</sup>は、トルニキオスが擁立された理由の一端を明らかにしているのである。

このように見ると、反乱軍の中核を成したアドリアノーブル駐屯軍の幹部たちが、自分たちよりも家格も爵位も高く、中央政界に顔が利くトルニキオスを反乱軍の旗印として担ぎ出した事情も得心がゆくだろう。その一方で、今日、知られている限りでは、レオン・トルニキオスが西方属州で軍指揮官職を務めていた記録はなく<sup>29</sup>、一般将兵が彼にどの程度、忠誠心や愛着を覚えていたかは疑問である。プセルロスは、「多くの大衆」(おそらく兵卒もここに含まれるだろう)に対して、彼らを買収するための原資もなかったのも、トルニキオスは彼らの税負担を免除すると共に、掠奪を許して、戦利品をそのまま各自の取り分とすることを認めた、と言い立てている<sup>30</sup>。この発言に信を置くなら、一般の兵隊たちが反乱に加わった動因は、トルニキオスと彼の大義を支持していたから、というよりも、

単に目先の物質的利得に誘われた結果である、と考えた方がよさそうである。皇帝への私怨を抱えた総大将のトルニキオス、元の地位への復帰、待遇の改善を希求する西方軍の幹部層、甘言に先導され、利得欲に駆られた一般の兵卒層。3者3様の思惑を抱きながらレオン・トルニキオスの反乱は開始されたのである。

## (2) イサキオス・コムネノスと東方門閥

挙兵までの経緯が判然としないところがあったレオン・トルニキオスの反乱に比べると、イサキオス・コムネノスのそれは、スキュリツェスの詳細な記述のおかげで、容易に、ほぼ完全な過程を復元することができる。この史家の記述に基づいて、反乱に至る経緯と主要な参加者を跡付けておこう。

発端は、1056年に発足したミカエル6世(在位1056-1057)の政権が実施した不公平な人事と、それに対する東方の高級軍人たちの反発に求められる。皇帝は、首都の文官層を厚遇する一方、将軍たちに対しては冷淡で、彼の即位と前後して多くの高級軍人がその地位を追われ、皇帝に近い人々と交替させられていた<sup>31</sup>。

そうした状況において、例年、皇帝によって元老院の構成員に賜金が分配される復活祭の時期を見越して、1057年春、東方から軍人たちの一団が都に現れ、皇帝に面会を願い出た。彼らは、不正な人事を正し、自分たちにも等しく恩恵を施すよう皇帝に請願する。その後の宰相との会見時のやりとりから引用すれば、文官を「国防に従事させたり、敵と戦わせたりせず、子供のころから戦いに従事し、警戒に努め、皆が安らかに憩えるようにしている人々をないがしろにしたり、皇帝の寛大さから排除したりしないように」してほしい、というのが彼らの言い分だった<sup>32</sup>。

このとき、皇帝への請願に参加した面々をスキュリツェスの記述順に列挙すれば、マギストロスの爵位を帯びたイサキオス・コムネノスとカタカロン・ケカウメノス、ヴェスタルケスのミカエル・ブルツェス、それにドゥーカス家のコンスタンティノスとヨハネスの兄弟の名が挙げられている<sup>33</sup>。スキュリツェスによれば、これに加えて、「アルコンテスたちの中で他の選り抜きの人々」が彼らに同行していた、というから、上京した軍人たちの人数はさらに多数に上ったことは確かだが、名を挙げられている上記の5人がその代表格であったのは間違いないところだろう。スキュリツェスはドゥーカス家の兄弟が帯びた爵位を明示していないが、アッタレイアテスによれば、コンスタンティノス・ドゥーカスの爵位は、ブルツェスと同じヴェスタルケスであったようだ<sup>34</sup>。

軍人たちに謁見した皇帝は、彼らの請願に耳を傾けることなく、プロエドロスへの昇進を求めたイサキオス・コムネノスとカタカロン・ケカウメノスの願いも退けられた<sup>35</sup>。彼らは、さらに、当時、国政の実権を握っていたプロトシュンケルロスのレオン・ストラボスポンデュロス<sup>36</sup>の許を訪ね、



重ねて彼らの待遇改善を求めたが、いっこうに色よい返事は得られなかったばかりでなく、あからさまな侮蔑を受けてその場を去らなければならなかった<sup>37</sup>。このときの軍人たちの心理状況の変化をスキュリツェスは次のように描き出している。

「またしてもひどい扱いを受けた人々は全ての希望を失って、心の底からくやしがった。そして、当初は、誰もがするように、会話の中で、小声で皇帝に対する愚痴をこぼしていたが、節度を越えて、皆が酔った勢いで激昂し、正義のために立ち上がり、報復するのだ、と言い張った。」

彼らは大教会、すなわち聖ソフィアに場所を改め、彼らに侮辱を加えた連中に報復することを誓いあった<sup>38</sup>。ここに反乱の密約が成立する。このとき、ケカウメノスの提案で、彼ら同様、皇帝の処遇に不満を抱いており、その一方で、当時の、かなりの軍勢を指揮下においていたブリュエンニオスを陰謀の仲間に加えることも了承された<sup>39</sup>。

さらに、談合の話題は、反乱軍を率いる対立皇帝の人選へと移った。ここでもスキュリツェスの記述を引けば、彼らは「高齢であること、男らしさ、経験」において、ケカウメノスはその任に適していることで意見が一致したが、ケカウメノスはそれを固辞し、自らに代わってイサキオス・コムネノスを推したため、結局、コムネノスが対立皇帝として擁立されることが取り決められたのだという<sup>40</sup>。

プセルロスは、対立皇帝の選出プロセスについて、これとは異なる説明を加えている。彼によれば、軍隊がイサキオスを擁立した後、イサキオス自身はコンスタンティノス・ドゥーカスに全軍の指揮権を譲る用意があったのだが、後者はこれを辞退し、見返りにドゥーカスにはカイサル<sup>41</sup>の地位が約束された、というのである<sup>41</sup>。この挿話は、イサキオス・コムネノスの反乱をめぐる記述中ではなく、皇帝となったイサキオスからコンスタンティノス・ドゥーカスへの権力の移譲をめぐる記事の中で言及されているため、ドゥーカスと親密な関係にあったプセルロス<sup>42</sup>が、コンスタンティノス・ドゥーカスが当初からイサキオスの後継者に擬されていたことを強調するために捏造した疑いは拭いきれない。あるいは、プセルロスは別の個所で「<sup>フレートス・アベン</sup>全ての大衆」はドゥーカスが皇帝となることを望んだが、後者はイサキオスにその地位を譲った、とも語っている<sup>43</sup>ので、皇帝候補としてドゥーカスの名が挙げがったのは、聖ソフィアの謀議の際ではなく、反乱軍が首都に迫り、都の中でも騒擾が発生しようとした段階だった、と考えるべきかもしれない<sup>44</sup>。いずれにしても、聖ソフィアに集まった高位の軍人たちの中で、ドゥーカスを推す動きはさほど強くなかった、と考えても差し支えあるまい。

ここで改めて、イサキオス・コムネノスが一团の軍人たちの中から対立皇帝に選ばれた要因を考察してみたい。先にも述べたように、井上浩一氏は、イサキオスが反乱軍のリーダーに選ばれたのは、彼が擁する家産組織、私兵集団が決め手になったことを説く<sup>45</sup>が、史料を読む限りではそれを裏付けるような記事はどこにも見当たらない。上述したように、ケカウメノスが当初、皇帝候補の適任者と

されたのは「高齢であること、男らしさ、経験」といった条件が勘案された結果であつたとスキュリツェスは語っているから、イサキオス・コムネノスについてもこれらの条件が準用されたことはほぼ間違いないところだろう。最初に登場する「<sup>グーラ</sup>高齢であること」と、第3の条件である「経験」を合わせて考えれば、総大将には、豊富な経験を積み、それなりの年齢に達した人物が相応しい、という通念が存在したことが窺える。裏返せば、経験の乏しい若輩者は不適格者の烙印を押されて、選出対象から排除されたことになる。第2の条件である「<sup>アンドレイア</sup>男らしさ」は「勇氣」、「豪胆さ」といったニュアンスを含んでいるから、軍を統率する將軍に相応しい資質がそこに込められていた、と考えると大過なからう。要するに、反乱軍の首領に求められた資質は全軍の司令官に相応しい豊かな軍務経験と指揮能力だったのである。

次に、ケカウメノスが反乱軍の総大将の地位をイサキオス・コムネノスに譲った理由を考えてみよう。ケカウメノスには何が欠けており、コムネノスにはケカウメノスを凌駕するいかなる資質が備えられていたのか。これについては、彼らと会見したミカエル6世の言動としてスキュリツェスが残している記事が手掛かりとなるはずだ。

皇帝は兩人と対面したとき、勇敢で立派な將軍たちを褒めたたえたが、とりわけケカウメノスに対しては「父祖や最良によってではなく、自らの勇敢な振る舞いによって榮譽にあふれた地位を得た」と称賛したという<sup>46</sup>。これを言いかえれば、イサキオス・コムネノスには、ケカウメノスに欠けていた名門の出自と人脈が具備されていた、ということになる。「生まれの高貴さ」は、先にスキュリツェスが挙げている皇帝適格者の3条件には含まれていないが、それが同時代人に重視されていたことは、プセルロスが、コンスタンティノス・ドゥーカスが「生まれ」においてはイサキオス・コムネノスに優っていたことを指摘していることから分かる<sup>47</sup>。東方の有力軍事家門の当主たちが顔を揃えた今回の一件では、それを統率する指揮官としての経験と能力に加え、全軍の将に相応しい「毛並みの良さ」が暗に求められていたのである。

この点に関しては、プセルロスも、イサキオスが対立候補に推された理由について「実際のところ、生まれだけでなく、王者たる風貌、心の気高さ、精神の強靱さにおいて抜きんできていたこと」を挙げており、人間としての内面的な資質と並んで、彼の高貴な出自が皇帝たるべき条件の中に含まれていたことを証言している<sup>48</sup>。そのあたりの事情を再確認するためにも、反乱に加わった人々のプロフィールを、ここで簡単に通覧してみよう。

まず、全軍の大將に推されたイサキオス・コムネノスについて。彼に関しては、先にも見たように、繰り返し出自の高貴さが強調されるが、今日、知られている限りでは、その家系は彼の父マヌエル・エロティコス以前には明確な形では遡りえず、実際には新興の家門に属していたと言うべきであろう<sup>49</sup>。

同家が名門として同時代人に認識されていたのは、現実の家門の古さ以上に、ビザンツ中期の黄金時代を現出させたバシレイオス2世(在位976-1025)に同家の成員が重用され、イサキオスとヨハネスの兄弟が同帝に後見された、という事実が大きく負っていたことは明白であろう<sup>50</sup>。軍務に就いたイサキオスは東方戦線の司令官職を軸に順調に昇進を重ね、イベリア長官(爵位はパトリキオス)を経て、コンスタンティノス9世の治下には東方のストラトペダルケスに上り、爵位も前述のようにマギストロスに達していた<sup>51</sup>。なお、彼はパフラゴニア地方カスタモンに所領を有し、その地は今回の一件でも反乱軍の集結地となっているが、彼がその地にどの程度、定着し、その所領経営が彼の社会的勢威の増大にどれほど貢献したかに関しては、確たる証拠はないことも言い添えておかなければならない<sup>52</sup>。

軍歴の輝かしさではカタカロン・ケカウメノスも負けてはいなかった。彼は、1041年頃、プロトスパタリオスの爵位を帯び、アルメニアコイの<sup>タグマ</sup>軍団を率いてシチリア遠征に参加、メッシナ防衛戦に貢献したこと<sup>53</sup>を皮切りに、帝国の東西前線で奮戦し、勲功を重ねながら昇進を果たしていった。彼が就いた官職を就任順に列举すれば、パリストリオン長官(ドナウ流域)、イベリア長官(アルメニア国境)、東方のストラテラーテス(対ペチェネグ戦)、アンティオキア長官、ということになる。この間に爵位もマギストロスに上がっているのは先に見たとおりだ<sup>54</sup>。

一般に、彼はアルメニア系の家門に属すと考えられている<sup>55</sup>が、彼の父祖の具体的な氏名や、11世紀の有名な著述家ケカウメノスとの関係などをめぐり、はっきりしたことは何も分かってはいない<sup>56</sup>。他方、彼は本拠地のコロネイアで一千もの家兵を動員することができた<sup>57</sup>から、その勢威が彼以前に遡るかは不明ながら、軍務を積む一方で、在地社会に深く根を下ろし、強固な基盤をそこに築いていたことは間違いないところであろう。

皇帝への請願に参加した他のメンバーに転じると、第3の皇帝候補に擬されたコンスタンティノス・ドゥーカスは、イサキオス・コムネノス同様、パフラゴニア地方に拠点を持っていた模様である<sup>58</sup>。彼の家系がこの地域に一定の繋がりを持っていたことは、彼の最初の結婚相手が、東隣のアルメニアコイに本拠を持つコンスタンティノス・ドラッセノスの娘だったこと、また、彼の弟のヨハネスも、パフラゴニアの有力家門ペゴニテス家の女性と結婚していること、から窺える<sup>59</sup>。他方、彼は、総主教ミカエル・ケルラリオスの姪エウドキア・マクレンボリティッサと再婚したことで首都の政治勢力とも関係を深めつつあった<sup>60</sup>。今回の反乱の際にも、そうした彼の人脈が無視しえぬ役割を果たしたように思われるのだが、それについては後で再論することにしたい。彼が生まれにおいてイサキオス・コムネノスを凌ぐ人物だった、という先のプセルロスの発言は、彼の家系が10世紀初頭の有名な将軍、アンドロニコスとコンスタンティノス父子の後裔である、というこの史家の持論に基づいているのだらう<sup>61</sup>。それまでの彼の公職歴についてはほとんど知られていないが、1057年時点でヴェスタルケスである点に着目すれば、宮廷内でもそれなりに重きを成した人物であったと考えて差し支えあるまい。

同じく反乱当時、ヴェスタルケスだったミカエル・ブルツェスの家系は、彼の祖父で969年のアンティオキア攻略の立役者だった同名のミカエル・ブルツェスに遡る<sup>62</sup>。現存する印章資料から見る限り、彼は一貫して軍人としてのキャリアを歩んできたらしく、「アンテュパトスかつストラテegos」と「アンテュパトス、パトリキオスかつストラテラーテス」という2通りの肩書を帯びた彼の印章が知られている<sup>63</sup>。彼の所領がテマ・アナトリコイにあったことは、反乱が実行に移されたとき、彼が他の僚友と共に、故郷を脱してイサキオスの所領であるカスタモンへと急行していることから明らかになる<sup>64</sup>。

このとき、ブルツェスと共にカスタモンへ走った人々として、スキュリツェスは、首都での請願活動の際には登場していない何人かの人物の名を挙げている。それを史家が記載する順に列挙すれば、プロエドロスのロマノス・スクレロス、[ニケフォロス・]ボタネイアテス、バシレイオス・アルギュロスの息子たち、であった<sup>65</sup>。

なかでも注目されるのは、ロマノス・スクレロスの存在である。というのも、彼は、当時、イサキオス・コムネノスやカタカロン・ケカウメノスを上回るプロエドロスの爵位を帯びており、単に宮廷内の序列だけから見れば、反乱軍のトップにいてもおかしくない人物だったからである。また、彼の家は9世紀初頭にまで遡りうる、ビザンツでも有数の古い家系であり、10世紀後半に大反乱を起こしたバルダス・スクレロスは彼の曾祖父にあたるなど、数々の将軍や軍幹部が一族から輩出している点でも、反乱軍の中で目立つ存在だったと思われる<sup>66</sup>。彼自身、コンスタンティノス9世治下にプロートストラトル、トラケシオイのストラテegos、アンティオキア長官を歴任し、軍歴においてもケカウメノスやイサキオス・コムネノスに引けを取らぬキャリアを積んでいた<sup>67</sup>。そのように見れば、彼は、反乱軍の中で有力な皇帝候補の一人になりえたことは容易に想像できるであろう。果たして彼はどの段階で陰謀の一味に加わったのだろうか。

結論から先に言えば、都に上った東方の高級軍人の一人として、スクレロスは最初から反乱の謀議に加わっていたであろう、というのが筆者の見立てである。先に見たアナトリコイの有力者たちの脱走劇を語る際、スキュリツェスがスクレロスに関して、言い訳がましく「彼もまた陰謀者に加わっていたのだ」と言い添えている<sup>68</sup>のが傍証となろう。つまり、スキュリツェスは、首都での軍人たちの請願時、ロマノス・スクレロスの姿を「アルコンテスたちの中で他の選り抜きの人々」の中にもぐりこませて、実名を挙げるのを意図的に避けた、と考えられるのである。

彼がそうした操作を行った理由を探し出すのはそれほど難しいことではない。先にも見たように、彼は複数の人物を列記する場合、爵位の高い順に名を挙げるのを常としており、その習性に従えば、ロマノス・スクレロスを一団の筆頭に記すのが道理となろう。宮廷内の席次は有力者間の序列を決め

る際にも大きな意味をもったから、東方からの請願者の一団の中でスクレロスが名目的な筆頭者の地位を占めていた可能性も排除できまい。しかし、仮に現実がそうであったとしても、スキュリツェスには、それを隠蔽しなければならない動機があった。彼がその歴史を著していた11世紀末、帝位にはイサキオスの甥であるアレクシオス1世が就いており、コムネノス家の威光に水を差すような記述は憚られたのが第一の理由であろう。また、J.シェパードが推定している<sup>69</sup>ように、彼の歴史叙述の最後の部分がカタカロン・ケカウメノスの私的な手記を情報源としていたとしたら、おのずとケカウメノスの役割が強調されることになり、スクレロスはそのあおりを受けて脇役に追いやられた、という一面もあったかもしれない。

聖ソフィアにおける謀議の席でスクレロスの名が対立皇帝の候補として挙げたかどうかについては、それを窺わせる情報が皆無のため、現時点では否定的な立場を取らざるを得ない。実際、彼に多くの人々の支持が集まった、と考えるのは難しいだろう。というのも、彼の華々しい栄達の背後には、彼の姉であるマリア・スクレイナがコンスタンティノス9世帝の愛妾だったという事実があった<sup>70</sup>のは周知のことであり、決して彼の個人的な勲功に帰されたわけではなかったからである。その意味で、将軍としての資質や経験において、彼はイサキオス・コムネノスやケカウメノスに水をあけられており、そのことは、その後、皇帝軍との戦闘の場において白日の下に晒されることになるのである。

他の同輩たちの中では、バシレイオス・アルギュロスの息子たちも、家門の伝統と血筋の高貴さにおいて、スクレロスに劣らぬ威光を帯びていた。歴史上に知られるアルギュロス家の始祖は840年代に現れており、彼ら自身は皇帝ロマノス3世アルギュロス帝(在位1028-1034)の甥であった<sup>71</sup>。ところが遺憾なことに、スキュリツェスは反乱に参加した同家の成員について、ただ「バシレイオス・アルギュロスの息子たち」と言うのみで、彼らの個人名も肩書も一切を明らかにしていない。これは、先に見たドゥーカス家のコンスタンティノスとヨハネスの兄弟の扱いとは明らかに異なる態度である。この点について史家の胸の内を詮索するのは容易でないが、こうした待遇の違いが11世紀後半の政治情勢と無縁でなかったことだけは確かだろう。なぜなら、ドゥーカス家の兄弟はイサキオス・コムネノスの即位以降、常に政権の中核にあったのに対し、アルギュロス家の兄弟の動静を報じる文献はこの後、途絶えてしまうからである<sup>72</sup>。そのように見れば、スキュリツェスが彼らについて簡略に書きとばしているのも分からないでもない。

主要な反乱加担者の中で最後にニケフォロス・ボタネイアテスについて論じることにしよう。ボタネイアテス家は、コムネノス家同様、バシレイオス2世に登用されてビザンツ軍事機構の中核に進出した家系である<sup>73</sup>。アッタレイアテスが語るところによれば、当時のニケフォロスの爵位はマギストロス、すでにコンスタンティノス9世治下にドナウ国境で軍司令官を務めた経験を有していた<sup>74</sup>。

以上に挙げたメンバーが、イサキオス・コムネノスの反乱の主要な支持者である。これ以外に、ケカウメノスの提案によって一味に加えられたバルカン貴族のブリュエンニオス、皇帝軍との戦いの戦死者の中に名が挙がるレオン・アンティオコス<sup>75</sup>をそれに加えることもできるだろう。

ここで、2つの反乱の支持者たちの構成を比較してみると、両者の類似点と相違点がくっきりと浮かび上がってくるのが分かるだろう。

大雑把な類似点を挙げれば、いずれの場合も、反乱参加者に地理的なまとまりが認められる点が指摘できる。レオン・トルニキオスの支持者はマケドニア、とりわけアドリアノーブル駐屯軍の幹部たちで固められていたし、イサキオス・コムネノスのそれは、ブリュエンニオスを例外として、大多数が小アジアに拠点を有する軍事貴族で占められていた。ただし、もう少し仔細に検討を加えてみると、イサキオスの反乱支持者は、トルニキオスのそれに比べて、より広い地域から集まっていたことにも気づくはずである。コムネノス家とドゥーカス家の拠点は小アジア北部のパフラゴニア地方、ケカウメノスの本拠地は北東部のコロネイア、そしてスクレロス、ブルツェス、アルギュロス、ボタネイアテスなどの諸家門の本拠は中部のアナトリコイ(フリュギア地方)だった。いわば、イサキオス・コムネノスの反乱は、これら3つの地域の連合勢力によって支持されていたのである。これに比べるとトルニキオスの反乱支持者の地域的閉鎖性、空間的な広がりへの乏しさは歴然たるものがある。

反乱参加者たちの顔ぶれを比べても、イサキオス・コムネノスのそれと比べて、トルニキオス陣営の支持者たちが相対的に小粒に見えるのは否定できまい。トルニキオスの陣営では最も爵位の高いトルニキオス本人ですらヴェステスの位に留まり、他の支持者たちはせいぜいプロートスパタリオスカパトリキオス程度であったのに対して、トルニキオスの爵位よりも上位のヴェスタルケス以上の保持者は、イサキオス陣営にはコムネノス、ケカウメノス、ロマノス・スクレロス、ミカエル・ブルツェス、コンスタンティノス・ドゥーカス、ニケフォロス・ボタネイアテスと6人もいる。こうした相違は、トルニキオスの支持者たちがマケドニア駐屯軍の幹部クラスに留まったのに対し、イサキオスの支持者たちの大半が、それ以前に帝国各地で軍司令官を務めていた将軍クラスから成っていた、という事実から説明することができるだろう。トルニキオスの反乱軍はアドリアノーブル駐屯軍というひとつの地域軍事組織を核として組織されているのに対して、イサキオス・コムネノスのそれは歴戦の将軍たちが各自の地域勢力を糾合した統合組織と特徴づけることができるのである。

支持者たちの家門が帯びる伝統、威光を比べても両者の違いは歴然たるものがある。イサキオス・コムネノスの陣営には、家門の成立を9世紀まで遡らせることができるスクレロス家やアルギュロス家、10世紀前半の将軍の後裔を称するドゥーカス家など、古い家系を誇る貴族たちが連なり、比較的、新興の家系であるコムネノス家やボタネイアテス家にしてもバシレイオス2世愛顧の家系だったこと

を誇ったのに対し、トルニキオス陣営の支持者は多くが史料初出の「新人」であり、トルニキオス以外では唯一、10世紀末に一族の成員の活動が知られるヴァタツェス家にしても、それが史料に残されたのは、アドリアノーブル在住の軍人だった某ヴァタツェスがブルガリア王との内通の嫌疑をかけられ、後者の許に逃亡した、という事件<sup>76</sup>にまつわるものであり、同じ時期にイサキオス・コムネノスやボタネイアテスの父祖たちがバシレイオス2世帝配下の部将として華々しく活躍していたのと比較すれば、どうしても見劣りしてしまうのは否定できない。

以上の考察から、全体として、2つの反乱が帯びた性格の違いも、漠然とではあるが明らかになってくるように思われる。トルニキオスの反乱は、基本的に、アドリアノーブルに拠点を持った軍幹部層が、自分たちの一族縁者の中でほぼ唯一、中央政界に足がかりを有したレオン・トルニキオスを対立皇帝に擁立して実行した、極めて地域性が強い、換言すれば外部に対しては閉鎖的な、軍事反乱だった。それと比べれば、イサキオス・コムネノスの反乱はそれほどの地域的一体性は認められない。先に見たように、それは、パフラゴニア、コロネイア、アナトリコイという3つの地域を拠点とした貴族たちの寄り合い所帯であり、反乱軍全体のリーダーを選ぶにしても、トルニキオスのケースのように最初から自明の候補がいたわけではなく、皇帝候補に相応しいと目された複数の人材の中から合議の末に選ばれる、という方式が採られている。反乱軍が複数の集団の集合体的な性格を帯びたことは、一面において、組織の団結を困難にし、内部分裂を助長させかねなかったが、他方においては、経験豊かで有能な人材を陣営内に多く抱えたことは、決してマイナス要因ばかりではなかったことも指摘されるべきだろう。この結果、イサキオスの反乱軍は有能な指揮官の一団と、ビザンツ社会の各所に張り巡らせた人的ネットワークを獲得したのである。彼らの組織が当初から外部の人間にも開かれていたことは、ブリュエンニオスの勧誘の件からも分かる。むやみに謀議に加わる人間を増やせば、それだけ秘密が漏れる危険性も増大するから、こうした姿勢は常に危険と隣り合わせだったのも事実である。だが、後で見るように、イサキオス・コムネノスの反乱成功の決め手のひとつが、首都の政治勢力との同盟関係にあったことを思えば、こうした人的関係の広がりを見做することはできない。そうした状況については、以下において、反乱の進行状況を通観するなかでさらに詳しく考察してみよう。

### Ⅲ 反乱の顛末

本章の課題は、2つの反乱の挙兵から軍事行動の終結に至るまでの経過を略述し、その成否を分けた要因を探ることだ。また、ここまでの記述では十分に論じられていなかった皇帝政権側で反乱に対峙した人々の顔ぶれについても、可能な限り言及したい。政権を支える側の陣容と対比することで、

反乱に結集した人々の特質がいつそう明確になると期待されるからである。

#### (1) レオン・トルニキオス—偶像の失墜—

1047年9月14日、トルニキオスは首都を脱出してアドリアノーブルに向かった<sup>77</sup>。彼は直ちに軍の招集に着手し、短期間で十分な兵力を整えることに成功する。反乱軍は正式にレオン・トルニキオスを皇帝に擁立することを決定し、彼は豪華な装束を身にまとい、兵士たちが持ち上げた楯の上に乗って、盛大な歓呼を受けた<sup>78</sup>。2日後、陣容を整えた軍はアドリアノーブルを発進し、一路、コンスタンティノーブルに進軍を開始する<sup>79</sup>。反乱軍は掠奪を繰り返しながら街道を進み、途中で一切、抵抗を受けることなく首都の前面に到達した。彼らは、皇帝に忠実な東方の軍勢が東部国境地帯で作戦行動に就いており、すぐには駆けつけられない状況にあること、首都自体には十分な守備兵はおらず、首都民衆の皇帝に対する支持も決して確固たるものではないことを知っていた<sup>80</sup>。反乱軍の意図は、軍事力を見せつけて都の内部の動揺を惹起させ、首都民が自発的に現皇帝を廃してトルニキオスを新たな支配者として受け入れるよう仕向けることであった。短期間に決着をつけられるかどうか反乱の成否はかかっていた。艦隊をもたぬ反乱軍には首都を完全に封鎖する術はなく、長期の持久戦になれば、その間に東方辺境から小アジアの軍勢が馳せ参じるだろうから、彼らの企てが成功する望みはいっそう小さくなるのは明らかだった。

反乱軍の作戦に成算があったことは、彼らが出現したとき、都の内部で動揺が走り、あちこちで市民の集会が開かれ、反乱軍方に寝返るかどうか議論が交わされた、というプセルロスの証言や、首都民の支持確保を危ぶんだ皇帝が東方軍を呼び戻すために急使を発した、というスキュリツェスの記事からも窺える<sup>81</sup>。

皇帝は必死に首都の防衛体制を整え、軍勢をかき集めた。普段は儀仗兵として宮殿に仕えるアラブ人の衛兵隊の他、元老院議員が配下の家人を武装させ、監獄から囚人たちが解放されて、寄せ集めの軍隊が編成された。スキュリツェスによれば、それでもその兵力は一千に満たなかったという<sup>82</sup>。城壁には一般の市民が動員されて守備に就いた。

反乱軍は城壁の前に整然と居並び、トルニキオスは白馬に跨り、軍の精鋭を従えて先頭に立っていた。配下の触れ役が城壁に近づき、都の内部に向かってトルニキオスを皇帝として受け入れるよう呼びかけたが、城壁上からは嘲笑をもって応じられた。触れ役も、現皇帝に対する罵詈雑言で応酬し、城壁の内外で悪口と罵倒の言葉が飛び交った。

反乱軍が発した悪態は、皇帝コンスタンティノス9世の神経に障ったらしく、急遽、城内の軍勢の出撃計画が立てられた。これには皇帝腹心で南イタリア出身のアルギュロスが反対したが、宰相のコ



ンスタンティノス・レイクデスが強く出撃論を唱えたために押し切られてしまったという<sup>83</sup>。後にプセルロスは、このときの皇帝の失敗の要因の一つとして、軍事的経験をもたぬ人々に作戦を相談したことを挙げている<sup>84</sup>が、そうした人々の代表格がレイクデスだったのは明白であろう。

出撃作戦は散々な結果に終わった。皇帝方の軍は、兵力、戦闘能力の両面ではるかに勝る反乱軍に圧倒され、惨敗を喫した。総崩れになった皇帝軍は潰走に転じ、城門に殺到する。その様子を目の当たりにした城壁の守備兵も恐慌をきたして都の内部へと逃げ去ったから、反乱軍の前には大きく開け放された城門と無人の城壁だけが残されていた。史家たちが口を揃えて言うように、このときトルニキオスが配下の軍と共に都に突入していれば、容易にそれを制圧することができたことは想像に難くない<sup>85</sup>。

だが、トルニキオスは配下の軍の突撃を制止して、勝利に満足して自らの陣営に引き上げた。彼の念頭にあったのはあくまでも正統の皇帝として都に迎えらるることであり、暴力的にそれを席卷することは彼の意図するところではなかったのであろう。こうした彼の判断は、権力を掌握した後で統治を円滑に行うための布石であると考えれば、ただの判断ミスとも言いきれない部分も残る。しかし、目先の勝利に酔いしれ、詰めを誤ったのは明らかに彼のミスだった。皇帝コンスタンティノス9世は夜の間に態勢を立て直すことに成功し、城壁の警備を再強化していたからである<sup>86</sup>。

翌日、再び城壁前に現れて開城を迫ったトルニキオスに対して、都の守備兵は嘲笑と投石で応えた。その後、戦局が膠着状態に陥るにつれ、反乱軍の側に焦りの色が濃くなってゆく。叛徒の中からは脱走したり、皇帝方に走ったりする者が続出する。トルニキオスは、いったん兵を都から引き上げ、陣営を立て直すことを決意した<sup>87</sup>が、プセルロスが報じるところによれば、反乱軍の野営地には大量の補給物資が放置されたままになっており、すでにこの時点で反乱軍が統制を失いつつあったことが窺われる<sup>88</sup>。

トルニキオスは、マケドニア・トラキア地方で唯一、皇帝への忠節を守っていたライデストスの町にテオドロス・ストラボミテス、ポリュス、マリアノス・ブラナスの諸将を送り、一方、背後に現れたブルガリア人の軍勢にはヨハネス・ヴァタツェスを派遣して対処させた。ヴァタツェスは巧みにブルガリア人部隊を撃破したが、ライデストス攻囲戦は難航した。この町は現地の主教と、トルニキオスの縁者(!)の在地有力者ヴァタツェスの指導のもとに頑強な抵抗を繰り広げ、トルニキオス本隊をも加えた反乱軍の猛攻を凌ぎきったのである<sup>89</sup>。

最後に、現帝を支持する東方の軍勢が来着したことで反乱軍の命運は決した。皇帝軍の司令官マギストロスのミカエル・イアシテス<sup>90</sup>はあえて攻撃を控え、反乱軍の補給路を断って消耗を誘う一方で、帰順した者には赦免と褒賞を約束する書状を送って、反乱陣営の自壊を促す作戦を採った。その結果、

ストラボミュテス、ポリュス、ブラナスなど、トルニキオスの縁者の有力部将までが彼を見捨てて皇帝陣営に走り、孤立したトルニキオスは、最後まで彼への忠節を守ったヨハネス・ヴァタツェスと共に逃亡先のブルガロフゴンの教会で皇帝軍によって身柄を拘束された。両人は摘眼刑に処され、それ以外の叛徒は追放と財産没収が宣告されて、さしもの反乱も1047年末には終息する<sup>91</sup>。

以上の反乱の経緯を通覧すれば、皇帝方の急造部隊を粉砕した後、ただちに市内に突入しようとしなかったトルニキオスの状況判断の甘さが彼の命取りになったことは明白のように思われる。だが、もう少し仔細にこの反乱事件を検討すると、彼の失敗の背後には、もっと構造的な問題が伏在していたようにも感じられる。この点は、反乱の成功例であるイサキオス・コムネノスのそれと比較することで、さらに明確になるように思われるので、引き続いて後者の反乱の経緯を確認することにしたい。

## (2) イサキオス・コムネノス—武門の名家の矜持—

皇帝の慈悲を求めて都に上った東方の将軍たちが冷遇に憤慨して反乱の謀議を巡らせたことはすでに述べたとおりである。以下では、在所で挙兵の準備を進めるべく、彼らがそれぞれの故郷に舞い戻ったところから話を始めよう。

今回の反乱も、シナリオ通りにことは進まず、意図せざる事件で口火が切られた。ケカウメノスの提案で陰謀仲間に加えられたブリュエンニオスが軽率な行動の末に逮捕され、他の叛徒たちは自らの名誉と生命を守るため、すぐさま行動に移ることを迫られたからである。

そもその発端は、ブリュエンニオスが配下のカッパドキア人部隊を手なずけるために過大な俸給を分配することを目論み、それを拒んだ財務官のヨハネス・オブサラスを監禁したことにあった。ところが、ブリュエンニオスの不審な行動は、近隣で野営していた「ピシディア人とリュカオニア人の司令官」リュカンテス<sup>92</sup>の目を逃れることはできなかった。ブリュエンニオスは、リュカンテス配下の軍団に天幕を包囲され、逮捕されると、自由を取り戻したオブサラスによって摘眼刑に処せられ、身柄を帝都に送られたのである<sup>93</sup>。

この報に接したアナトリコイの叛徒たちは身の危険を感じて、イサキオス・コムネノスのカスタモンの所領に急行した。ここで改めてその名を記せば、ロマノス・スクレロス、ブルツェス、ボタネイアテス、パシレイオス・アルギュロスの息子たち、がそれである。彼らはコムネノスを説き伏せてすぐに挙兵させ、彼を対立皇帝に擁立した。スキュリツェスの伝えるところによれば、それは、第10インディクティオの年(=1057年)、6月8日のことであつた<sup>94</sup>。

反乱軍は、合流の遅れていたケカウメノスの軍勢を待って、しばらく現地に留まった。この間、ケカウメノスが心変わりして反乱軍を鎮定する軍を起こすのではないか、という風評が流れて叛徒たち

の困惑と動揺を招いたことをスキュリツェスが報じている<sup>95</sup>。その一方で、小アジアに駐屯するそれ以外の軍勢、たとえば、先にブリュエンニオスを逮捕したリュカンテス配下のアナトリコイの軍団のようなそれ、が、反乱軍に対して積極的な対抗措置を講じようとした動きは見受けられない。実は、このすぐ後に明らかになるように、リュカンテスは不本意ながらニカイアに至るまで反乱軍と行動を共にすることを余儀なくされていたのである。史書からは彼が反乱軍に編入された事情は詳らかにしえないが、明らかに将軍たちの陰謀の局外にあり、管下の反皇帝運動を取り締まるべき立場の彼ですら、少なくとも表面的には行動を共にすることを強いられたのであるとすれば、当時、彼の周囲の小アジア現地社会では反乱軍を支持する動きが抵抗不能の大きな趨勢になっていた、と考える他はあるまい。事実、プセルロスは「勇敢な将軍が帝位に昇り、非常に有力で名前が知られている諸家門が彼に加担していることを耳にすると、誰もが僅かな時もおくことなく、ただちに彼の許に馳せ参じたのであり、それはあたかも優秀な走者が相手に先んじようと疾走しているかのようであった」と語り、小アジア駐屯軍が雪崩を打って叛徒の陣営に転じた様子を伝えている<sup>96</sup>。この記事でとりわけ注目されるのは、有名な諸家門の参加が一般将兵参集を加速させた、と報じられている点であろう。その意味でも、今回の反乱は、イサキオス・コムネノス個人の資質と名声を抛り所にしたものというより、小アジア社会に確固たる支持基盤を築いていた複数の有力家門の勢威を結集して成立した運動と捉えることができるのである。

その後、小アジア東北部の軍勢を率いたケカウメノスが反乱軍に合流すると、イサキオス・コムネノスは首都への進軍を開始した。行軍はスムーズに進み、叛徒の軍勢は、ほどなくビテュニア地方の中心都市ニカイアを占領してここに前進拠点を据えた。イサキオス・コムネノスはこの機会に、心ならずも反乱軍に加わっている将兵に対して、隊を離れて自由に立ち去ることを許可する布告を発している<sup>97</sup>。このくだりからも、反乱軍の勢力が急激に膨れ上がり、必ずしも熱心な支持者でなくても与同せざるを得ない状況が生まれていたことが読み取れる。そうした動きに対して、イサキオス自身は、兵力減を招くにせよ、信頼のおけない浮動層を切り捨て、戦意旺盛な兵員のみを手元に残して皇帝方との決戦に臨もうとしていたのである。

このとき反乱軍から離脱して皇帝方に帰順した主だった軍の高官として、スキュリツェスは、アナトリコイ軍団の指揮官リュカンテス、テオフュラクトス・マニアケス、それにカルシアノン部隊の指揮官「イベリア人」プニュエミオスの名を挙げている<sup>98</sup>。このうち、既述のリュカンテス以外の2人の人物について付言しておく、カルシアノンの指揮官プニュエミオスについては、ここで付された「イベリア人」という添え名からグルジア系の出自が窺える以外、一切、詳細は不明であり、今回の事例のほかに彼の名を史料中に見出すことはできない。テオフュラクトス・マニアケスについても我々が持ち合わせている情報は乏しいが、彼が11世紀前半の有名な将軍ゲオルギオス・マニアケスの

縁者であったと推定すれば、この将軍と、今回の反乱の主要なメンバーの一人だったロマノス・スクレロスは犬猿の仲だったから、スクレロスが幅を利かした反乱軍にテオフュラクトス・マニアケスが嫌悪感を抱くのは自然な感情だった、と言えるだろう<sup>99</sup>。

皇帝ミカエル6世は、反乱軍接近の知らせを受けると、すぐに迎撃の準備に着手した<sup>100</sup>。軍征を統率する全権将軍であるストラテegos・アウトクラートルの地位には、プロエドロスかつ東方のドメスティコス・トーン・スコロンのテオドロス、それを補佐する地位にはマギストロスのアーロンが任じられた。テオドロスは女帝テオドラ(在位1055-1056)に仕えた宦官で、この女帝によって東方のドメスティコス職に就けられていた<sup>101</sup>。その後、彼は、政権がミカエル6世に引き継がれる際にも重要な役割を演じ、新政権でも軍のトップの座を保っていたのである。一方のアーロンは最後のブルガリア王イヴァン・ヴラディ斯拉ヴの息子で、同王国の滅亡後、ビザンツ皇帝に仕え、長年、東部国境地帯で軍事官職を歴任してきた人物である<sup>102</sup>。この人事は、彼の姉妹アエカテリナがイサキオス・コムネノスと結婚しており、彼が反乱軍の首領と義兄弟の関係にあったため、とりわけ注目に値しよう。こうした姻戚関係は当然、皇帝も承知していただろうから、彼の登用は、こうしたしがらみに囚われず皇帝に忠誠を尽くす誠実さが買われたか、あるいは、旧知の反乱軍陣営主要メンバーの切り崩しの役割が期待されたか、いずれかであろう。

皇帝軍の主力を成すバルカン駐留軍のトップには、マギストロスかつ西方とのストラテラーテスのバシレイオス・タルカネイオテスが据えられている。タルカネイオテス家はトルニキオス一派が後退した後、軍営都市アドリアノーブルの支配をブリュエンニオス家と二分していた軍事家門であり、彼が登用された背景には、ブリュエンニオスの逮捕と摘眼刑執行に揺れるマケドニア軍団の動揺を彼の個人的威光で鎮め、同軍団を皇帝権力の下にしっかりと繋ぎとめようとする政権側の思惑が込められていたに違いない<sup>103</sup>。

皇帝軍には、さらに、「フランク人」ランドゥルフの率いる外人傭兵部隊、反乱軍を離脱したリュカンテスとプニュエミオスの率いるアナトリコイとカルシアノンの部隊が加わった<sup>104</sup>。かくして反乱軍を上回る兵力を集めた皇帝軍は、首都対岸のクリュソポリスからニコメディアを経て南下し、ニカイアの北方に進んでいた反乱軍と対峙したのである。

両軍はニカイア北郊ペトロエーで激突する。皇帝軍の中央は総司令官のテオドロス、左翼の指揮はアーロン、右翼はバシレイオス・タルカネイオテスが統括していた。アーロンの配下には、リュカンテス、プニュエミオス、「フランク人」ランドゥルフがいたことが知られているので、皇帝軍左翼はフランク人傭兵部隊と皇帝に忠実な小アジアの軍団、そしてタルカネイオテスの率いる右翼は、西方属州、とりわけマケドニア管区軍で占められたものと思われる。中央のテオドロスが率いた部隊に関

しては情報が欠けているが、帝都周辺に駐屯する中央軍、あるいは印章資料から彼が長官職を兼務していたことが推定される小アジアのテマ・トラケシオイの軍団などによって構成されていた、と推測することは可能だろう<sup>106</sup>。

これに対して反乱軍は中央にイサキオス・コムネノス、左翼にカタカロン・ケカウメノス、右翼にロマノス・スクレロスが指揮する部隊が配置された。両軍の戦闘中、皇帝軍左翼に属する「フランク人」ランドゥルフが反乱軍のニケフォロス・ボタネイアテスと一騎打ちを演じたことが報じられているので、ボタネイアテスが反乱軍の右翼、つまり同郷のロマノス・スクレロスの指揮下に入っていたことが分かる。そこから推測すれば、反乱軍の3区分は、コムネノス配下のパフラゴニア部隊、ケカウメノスの率いる小アジア北東部のそれ、そしてスクレロスが統率したアナトリコイ、ないしはフリュギア地方の軍団、というように、それぞれの統率者の本拠がおかれた地域の部隊で構成されていた公算が高い。なお、ここでは、リュカンテスの指揮下に皇帝方に加わっていた「アナトリコイ」の部隊と反乱軍右翼のそれとの兼ね合いが気になるが、単にひとつの軍団が2つに分裂したのでないとするれば、スキュリツェスがリュカンテスを「ピシディア人とリュカオニア人の司令官」と呼んでいること<sup>106</sup>が考察の手掛かりになるかもしれない。すなわち、リュカンテスの権威はピシディアとリュカオニア、つまりアナトリコイ管区の周縁部に限定され、ボタネイアテスらの本拠が置かれた同管区中央のフリュギア地方の軍は反乱軍支持に回った、と考えることで、アナトリコイ軍団分裂という様相も整合的に理解することができるのである。

この会戦は反乱軍の勝利に終わった。皇帝軍は当初、左翼を指揮したアーロンの奮戦で反乱軍右翼の指揮官ロマノス・スクレロスを捕虜にするなど優勢に戦いを進めたが、逆に反乱軍左翼のカタカロン・ケカウメノスが対面の皇帝軍右翼の戦線を撃破し、相手の野営地に達するや形勢は逆転、皇帝方の潰走で戦いの幕は閉じられたのである<sup>107</sup>。

敗北した皇帝ミカエル6世は窮地に陥った。再度、兵を集めて反乱軍に対抗することも検討されたようだが、勝算に乏しいという理由で見送られた<sup>108</sup>。一方、勝者となった反乱軍にしても、彼らの最終的な目的を達成するために、この時点で具体的な見通しがあったようには思われない。反乱軍は帝都対岸に迫って皇帝政府に圧力を加えたが、艦隊をもたぬ以上、帝都を封鎖することはおろか、安全に対岸に渡ることすら彼らには容易なことではなかったからである。

こうした状況の下で皇帝側から和平を求める使節が反乱軍の陣営に現れた。使節団は3人の高官、すなわち、プロエドロスのコンスタンティノス・レイクデス、同じくプロエドロスのテオドロス・アローボス、そして「哲学者たちのヒュパトス」コンスタンティノス・プセルロスで構成されていた<sup>109</sup>。3番目のコンスタンティノス・プセルロスとは、すでに何度も登場している史家ミカエル・プセルロ

スに他ならない(ミカエルは彼の修道名)。プセルロス自身が言明するところによれば、彼は皇帝ミカエル6世に懇請されて、やむなく使節の役目を引き受けることになったのだという<sup>110</sup>。他の2人はプセルロス自身によって選ばれた。コンスタンティノス・レイクデスはコンスタンティノス9世モノマコス帝の下で宰相を務めた人物だったから、同帝の治下に軍の要職を占めた反乱軍の諸将とも面識があったはずである。「極めて高德で賢明な人」とプセルロスが評しているテオドロス・アローポスが使節に選ばれた理由は、そこに挙げられている人格者としての特質を除けば詳らかにしえないが、プロエドロスという彼の高い爵位を鑑みれば、彼が元老院を代表する人物の一人として加わっていたことはほぼ間違いないように思われる<sup>111</sup>。

使節団と反乱軍の間の交渉の様子は、当事者の一人だったプセルロスによって詳しく報じられている。それによれば、皇帝側の提案は①イサキオス・コムネノスをミカエル6世の養子とし、カイサルの地位を与える、②反乱の参加者には大赦を与え、罪は問わない、という2点が骨子になっていた。この提案に反乱軍の多くは納得しなかったが、イサキオスは、①ミカエル6世逝去時にイサキオスが唯一の後継者たることを明確にすること、②反乱中に彼が支持者に与えた官位その他の権利を追認すること、③今後もイサキオスが支持者に官職を分配できるよう人事権の一部を彼に共有させること、という3つの条件を加えた上で、原則的に皇帝側の提案を受け入れる意向を示した。皇帝はこれに応じ、イサキオスと彼を推した将軍たちの大多数も和平案に合意して、反乱は、対立する両陣営の間で妥協が成立したことで落ち着する展望が開けたのである<sup>112</sup>。

プセルロスに比べるとスキュリツェスの記事は簡略だが、大略、交渉の推移に関して両者の記述に大きな食い違いはない<sup>113</sup>。問題はこの後の記事である。スキュリツェスは、プセルロスの叙述にはない以下のような挿話を付している。

イサキオス・コムネノスと「彼と一緒にいた全てのアルコンテス」(=支持者の貴族たち)は皇帝との和平案に同意し、それが黄金印璽文書で確認されることを望んだのに対し、カタカロン・ケカウメノスだけがこれに真っ向から反対する意見を開陳した。彼は、固い誓約の上に彼らがミカエル6世の廃位を宣言した以上、同帝の權威を認めることは宣誓に背くことになり、神の怒りを招くだろうと語り、ミカエル6世の口車に乗って軍隊を解散させれば、イサキオスはほどなく毒を盛られて厄介払いされ、他の共謀者たちも眼球を抉られるだけだ、と主張して、皇帝側との一切の妥協に応じないよう主張したのである。さらに、ケカウメノスは、彼のこうした強硬な言動自体、皇帝の使節団の入れ知恵であることを暴露する。彼によれば、使節のメンバーは秘かに代わるがわる彼の許を訪れて、現在、都でミカエル6世を放逐し、イサキオスを皇帝として迎える陰謀が進行中であるため、決して妥協的な態度をとらぬようにと助言したというのである<sup>114</sup>。

プセルロスはこうしたケカウメノスの発言に関して一切、触れておらず、自らが主導した和平交渉が妥結した矢先に都で反皇帝暴動が勃発し、ミカエル6世が失脚してしまったのは、彼にとってまさに寝耳に水の出来事であり、彼自身、これに深く困惑させられた、と告白している<sup>115</sup>。換言すれば、当時、都で進行中の反皇帝陰謀に全く彼は関与しておらず、その間、彼は和平成立のため、使節の任務を果たすのに心血を注いでいたことが強調されているのである。それは、表面的には和平案を進めながら秘かにその決裂を画策していた、というスキュリツェスの伝える背信的な使節のイメージに対して、自らの潔白を主張するメッセージに他ならなかった<sup>116</sup>。

ここで我々が注目したいのは、むしろ、イサキオス以下の反乱軍の一党がケカウメノスを除いて使節団が持ち込んだ和平案に同意した、という事実である。この点に関し、かつて井上浩一氏は、反乱軍内部に、ミカエル6世の提示する皇帝絶対権の理念を受け入れ、自身の権力の正統化を図ろうとするイサキオス・コムネノスと、イサキオスをあくまでも自分たちの集团的利害の代弁者の座に止め、有力貴族の連合支配体制の樹立を目指すケカウメノスらとの間の理念的対立があった、という見解を提示している<sup>117</sup>。仮にそうした対立が反乱軍の中にあったとしても、対立の構図は専制君主の理念を信奉するイサキオス・コムネノスと、彼を「仲間内の第一人者」の座に止めようとする他の有力貴族の間にあったわけではなく、ケカウメノス以外の有力貴族たちはイサキオス同様、ミカエル6世の提示した和平案受け入れに乗り気だった、という点を見逃してはならない。もともと彼らが反乱に立ち上がったのは、彼らに対する皇帝の冷遇が原因であり、彼らの望む高い官位が正式に承認されれば、困難な武力闘争を続ける理由など何もなかったのは、考えてみれば、自然な成り行きと言えるだろう。彼らが目指したのは、国家の再分配機構における自らの分け前の拡大、という、いわば目先の利益の達成であり、「貴族連合政権」の樹立といった高邁な理念の実現は、彼らの大半の念頭にはなかったことを確認しておきたい<sup>118</sup>。

これと同時に、一連の交渉の経緯からは、イサキオス・コムネノスに率いられた反乱軍が、最終的に権力を掌握するための明確な行程表を欠いていた、という事実も露呈された。彼らが皇帝の提示した和平案を原則的に受け入れたこと自体、彼らが政権奪取に向けて具体的なプランを持ち合わせていなかったことの証左であろう。というのも、彼らの工作で都の中で反皇帝陰謀が進行中であれば、あるいは少なくとも、そうした動きがあることを彼らが事前に察知していたとしたら、性急に現政権との和解を進めることはなかった、と考えられるからである。その意味で、都の中で展開した反皇帝陰謀は、イサキオス・コムネノスが率いた軍事行動とは別個の運動だった、と思われるのである。そしてその運動の結果、最終的にミカエル6世は放逐され、イサキオス・コムネノスが権力の座に上がることを思えば、首都内の政治行動はイサキオスの政権樹立に決定的な役割を果たした、という言い方もできるだろう。それゆえ、以下では章を改めて、その経過を詳述することにしたい。また、こうし

た首都内部の勢力が反乱軍に呼応して皇帝権力に反抗するのは、レオン・トルニキオスの反乱の際には見られなかった現象であるだけに、両者の差異がいかんして生じたのか、その要因を探ることに重点をおくことにしよう。

#### Ⅳ 首都勢力の向背

皇帝からの使節として反乱軍の陣中に滞在中のプセルロスは、都で発生したクーデタの第一報が届いたときの様子を以下のように伝えている。

「まだ日が暮れる前に軍隊からの急使が皇帝[=イサキオス・コムネノス]の天幕に集まり、おそらくはカイサルにとって吉報となる次のような知らせをもたらした。すなわち、皇帝が権力の座から追われたのであり、元老院身分の一部が彼に対して行動を起こし、彼に帝衣を脱いで「神の叡智」の教会に避難することを強いた、というのである。だが、そうした言葉はカイサルの心を大きく動かすことも、我々を困惑させることもなかった。それらすべては虚報だと思われ、すぐに我々は冷静さを取り戻した。」<sup>119</sup>

都の騒擾と自らは無関係であることを装うプセルロスは、その後、詳しい情報を伝える使者が到着し、事件の全貌が明らかになったときも、それを、伝聞に基づく情報として以下のように簡潔に報じているだけである。

「騒擾を好む煽動者たち―我々もよく知る人々が元老院にもぐり込み、都をひっくり返して、一切の政治を混乱させ、沈黙を守る人々を焼き討ちにすると脅迫して冒険に乗り出させた。彼らは「神の叡智」の教会に押し入り、内陣を占拠して、今や総主教を苦もなく説得して、一党の頭に据え、大きな声で皇帝の廃位を宣言し、彼に廃位宣告の声明文を送りつける一方で、イサキオスに対しては、権力の座に就くことが最も期待される唯一の存在として、[彼の即位に]合意する歓呼が発せられたのである。」<sup>120</sup>

ミカエル6世を退位に追いやった帝都の騒擾事件は、従来、イサキオス・コムネノスの反乱の最後に登場する付随的エピソードと見なされ、さほど大きな関心を払われることがなかったように思われる。たとえば、先に引用した井上浩一氏の論文では、首都勢力は、「選挙王政」的皇帝理念に基づいて行動を起こしたが、すでにカイサル称号を帯び、軍を率いて都に迫るイサキオスを皇帝に迎える以外の解決策をもたなかったことが指摘されており、彼らの行動の限界がそこに認められている。彼らの運動は、事実上、ミカエル6世の軍に勝利したイサキオス・コムネノスの権力を追認する域を出ず、その意味で、大勢は、反乱軍が皇帝の軍を撃破した時点で決していた、と解釈されるのである。筆者自身、11世紀ビザンツ政治史の研究を始めた当初は、こうした見解を所与のものとしており、首都の



政治勢力を勝ち馬に乗る日和見主義者と見なして、その存在を重要視していなかったことを告白しなければならぬ<sup>121</sup>。

一方、こうした見解にはっきりと異議を呈しているのが渡辺金一氏である。氏はイサキオス・コムネノスの反乱に関し、「これを、將軍連中が結成した軍事政権による、コンスタンティノープル制圧ではない」と断言し、「もしイサキオスの旗揚げに呼応してコンスタンティノープルの元老院と民衆が上にみたようなうごきをしなかったなら、果たしてかれは首尾よく首都入城を果たせたであろうか」と疑問を發し、「反対皇帝のコンスタンティノープル入城にあたって決定打となったのは、軍隊ではなく、首都市民の向背だったのである」と明確に氏のテーゼを打ち出しているのである<sup>122</sup>。たしかに言われてみれば、コンスタンティノープルが抵抗の構えを崩さなかったとしたら、艦隊を持たぬイサキオスの反乱軍がそれを攻囲して、短期間で武力制圧することは容易でなかったことは想像されるところである。

こうした議論に対しては、小アジアから皇帝を支持する軍隊の来援が期待されたトルニキオスの反乱とは異なり、すでに皇帝軍を撃破してしまったイサキオス・コムネノスのその場合には、皇帝側に軍力で事態を打開する道はなく、早晚、反乱軍に屈する他なかったのではないか、という反論が当然、提示されることだろう。かつて筆者もそのように考えていた。

この点で、筆者が見解を改めたのは、今回の反乱からおよそ20年後の次のような出来事に触れたことがきっかけであった。1078年、コンスタンティノープルの人々は、バルカンで挙兵したニケフォロス・ブリュエンニオスの反乱軍に頑として抵抗したのに対し、小アジアで兵を挙げたニケフォロス・ボタネイアテスの軍が、これに続いて接近したときには、兵力はブリュエンニオスのそれよりもずっと劣っていたにもかかわらず、積極的にこれに呼応して、現職の皇帝廃位に立ち上がっているのである。それら一連の運動において、首都の政治勢力は独自の判断に基づいて主体的に行動していたことは明らかであろう。

ここで再び、渡辺金一教授の著書から、イサキオス・コムネノスの反乱に伴う帝都の騒擾に関連する箇所を引用してみよう。

「コンスタンティノープルでのクーデター謀議はまず聖ソフィア教会ではじまり、国家高官のほか、セキュリティツェスによれば、同職組合とその長たちもそれに加わったという。… 続いて総主教ミハエル・ケルラリオスがこの集会に、かたちは強制的に、だが内実はいかにもなくかれらと示し合わせた上で招じ入れられた。… そのかれは、仲裁裁判官として、ミハエル廃位、イサキオス推戴の可否を票決に付し、多数決にしたがってクーデター賛成派に軍配をあげた。」<sup>123</sup>

この記述では、総主教ケルラリオスが果たした役割は、集会の議決を追認する限定的なものであった、という印象を受ける。渡辺氏は別の箇所でも、11世紀以降、首都の聖職者層が皇帝選挙に介入する傾向が新たに認められるようになったことを指摘しつつ、「だがそれにもかかわらず、教会は、憲法上の皇帝選挙権者とは、ついにみなされなかった。ビザンツ人の憲法意識のなかでは、皇帝を選ぶのは、あくまで元老院、市民、軍隊の三者であり、またそれだけだった」と語って、教会勢力はあくまでも副次的な存在に留まったことを強調しているのである<sup>124</sup>。

ビザンツ人が帯びていたという「憲法意識」について、それが本当に彼らの行動規範として機能したかどうかを含め、検証する課題は多く、ここで詳しく論じる余裕はない。しかし、理念上の問題はともあれ、現実の政局において、教会勢力が果たした役割については、当該の史料の記述を吟味することでその妥当性を検証することは可能であろう。プセルロスの記述は先の引用文でほぼ尽きるため、ここでは事件をもっとも詳細に報じているスキュリツェスの記述に沿って事件を再構成してみたい<sup>125</sup>。

イサキオス・コムネノスの軍勢が首都の対岸に迫った8月30日<sup>126</sup>の早朝、突然、聖ソフィア聖堂に、マギストロスのミカエル、パトリキオスのテオドロス・クリュセリオス、同じくパトリキオスのクリストフォロス・ピュルロス、および「ヘタイレイアの全てのアルコンテス」<sup>127</sup>など多くの人々が押し掛け、大声で総主教の出馬を求めて呼びかけた。徒党のリーダー格のマギストロス、ミカエルは、首都長官を務めたアナスタシオスの息子であり、彼自身はコンスタンティノス9世治下にバルカン方面で属州長官の任にあった点<sup>128</sup>で反乱軍の主要メンバーと共通する経歴を持った人物だった。名を挙げられている他の2名については詳しいことは分らないが、テオドロス・クリュセリオスは、おそらくバルカン西部デュラキオンに勢威を有した家門の後裔、そしてクリストフォロス・ピュルロスは、ことによると首都の商工業者と結び付きの強い家系の一員かもしれない<sup>129</sup>。彼らが大教会に集結した表向きの理由は、皇帝のせいで彼らに強い困難な状況を総主教の手で打開してもらうためであったようだ。これに先立って、元老院議員たちはイサキオス・コムネノスを皇帝として認めないことをミカエル6世に誓約させられており、現皇帝がイサキオスと妥協に走った今となつては、イサキオスを歓呼すれば偽誓の罪を負い、誓約を守ればイサキオスを敵に回して身の破滅を招きかねない、という深刻なジレンマに直面していたのである。

当初、総主教は、聖堂に隣接する居館の扉を閉ざして面会を拒む素振りを示したが、様子を見に行かせた彼の甥2人が群衆に捕えられ、総主教が出てこないならば彼らを殺害する、と脅迫されるに及んで、「不承不承か、あるいは多くの人々が言うように、自発的にそうしたのかは不明だが」<sup>130</sup>、総主教としての正装に身を包んで一同の前に現れ、祭壇脇に設えられた席に着いた。

彼は、詰めかけた人々の求めに応じて、彼らが皇帝ミカエル6世と交わした誓約の破棄を宣言した。

かくして宣誓の拘束を解かれた人々は、晴れてイサキオス・コムネノスを皇帝として宣言する。あわせて、この決議に反対する人々は公敵の名が付されて、その屋敷は民衆の襲撃、掠奪にさらされるべきことが布告された。総主教は次席のステファノスを通じてこれらの決議を裁可し、アンティオキア総主教テオドロスも反対派に対する強硬措置を支持する立場を鮮明にした。

次席のステファノスに関しては、それ以上の情報がないため、その素性を明らかにすることができないが、もう一人の高位聖職者であるアンティオキア総主教については多少の知見を追加することが可能だ。スキュリツェスは彼の名を「テオドロス」と伝えているが、正確にはテドシオス・クリュンベルグスと言い、10世紀後半以降、複数の高級文官や高位聖職者を輩出してきた家系の成員である。その意味で彼は首都の文官貴族と心性を共有しうる存在だった、と考えることもできる。もともとビテュニア地方で修道士をしていた彼がこのとき首都にいたのは、アンティオキア総主教への叙任手続きのためにたまたま滞在していたためらしい<sup>131</sup>。

アッタレイアテスによれば、総主教は高官たち全員に聖ソフィアに出頭するよう呼び出しをかけ、国家の要職の人事が発令されたという<sup>132</sup>。ここから、相次いで使者が派遣され、イサキオス・コムネノスに対しては都の政変が告げられ、ただちに帝都に入ることが求められる一方で、ミカエル6世に対しては、彼の廃位が宣告され、速やかに宮殿を退去すべきことが勧告された。ミカエル6世は、使者として到着した府主教たちの口上を聞くと、徹底抗戦を唱える取り巻きの言葉を制して自ら帝位を降した。翌31日朝にはカタカロン・ケカウメノスの率いる反乱軍先遣隊が宮殿を接收するために都に入り、同日夕刻にはイサキオス・コムネノスの本隊も到着した。そして明るる9月1日、聖ソフィアで厳かに戴冠式が挙行され、反乱軍の総大將は、正式に皇帝イサキオス1世として即位したのである。

以上のような事件の経緯を一瞥する限りでは、そこで総主教以下の首都の聖職者層の果たした役割の大きさは否定の余地がないように筆者には思われる。もう一度、事件の推移を順に整理してみよう。まず、マギストロスのミカエルら反皇帝派の一団が聖ソフィアに集結した。ただし、この段階では、彼らの運動は、首都全体はおろか、元老院議員の総意すら集めておらず、単なる不満派分子の暴発の域を出ていない。この時点では彼らの運動は極めて限定的かつ脆弱であり、皇帝ミカエル6世がただちに制圧に乗り出せば、それを鎮圧するのはさほど骨の折れる仕事ではなかったはずだ。それゆえ、蜂起した人々にとって、総主教の支持は是が非でも必要だった。徳性において帝国で最高の地位にある総主教の支持は、いわば神意を示すものであり、彼らの行動を正当化するばかりか、それに抵抗する者に制裁を加える権利すら、彼らに付与したからである。

他方、総主教にとっては、その影響力をもっとも効果的なやり方で行使することが不可欠であった。彼が、当初から、叛徒の一味と意を通じていたことは、プセルロス以外の史家たちが暗に認めている

通りである。スキュリツェスの記述は奥歯にものが挟まったような曖昧な言い回しだが、総主教が叛徒と結託していたのを彼が確信していたことは、総主教が登場を強いられた、という記述のすぐ後で「そうした全てのことは、事実によって示されるように芝居であった」と言い添えていることから明らかであろう<sup>133</sup>。アッタレイアテスも、ケルラリオスが陰謀に加担していたかどうかは明らかでない、と言いつつ、総主教の縁戚者であるコンスタンティノス・ドゥーカスが反乱陣営の有力メンバーだったことを指摘して、そうした疑惑は否定できなかったことを強く仄めかしている<sup>134</sup>。いずれにしても、それ以前から、総主教ケルラリオスは皇帝ミカエル6世とは不仲だった<sup>135</sup>から、後者の延命を助ける意欲には乏しかったことは疑いない。

しかし、仮にそうだったとしても、総主教には、最初から反乱軍の支持者としては振る舞うことができない事情があった。もしも彼が最初から、対立する2つの陣営の一方を支持する姿勢を鮮明にしていたら、中立的かつ厳正な審判者としての彼の権威は大きく傷付けられてしまいかねなかったからである。それゆえ、彼はあくまでも、いずれの陣営にも与せず、紛争の局外に立って、人々の幸福のために最も望ましい解決策を模索する調停者の役回りを演じることで、自己の影響力を最大限に発揮しうる舞台を整えたのである。

実際、この時点で、総主教は、皇帝ミカエル6世政権とも、またイサキオス・コムネノスの率いる反乱軍とも一線を画し、独自の第三極を構築しようと画策していた節がある。そう思わせるのは、先にも触れたプセルロスの記事、すなわち、コンスタンティノープルの群衆は、ケルラリオスの縁者であるコンスタンティノス・ドゥーカスを皇帝候補に推したが、ドゥーカスはその地位をイサキオス・コムネノスに譲った、という挿話<sup>136</sup>が気になるからである。イタリアの研究者M.D.スパダーロが考察するところによれば、こうした逸話の背後には、総主教ケルラリオスが、自身の縁者であるドゥーカスを皇帝候補として擁立を図った、という事実が隠されていたのだという<sup>137</sup>。

だが、結局のところ、こうした総主教の思惑は、スキュリツェスやアッタレイアテスがまったくそれを無視していることから窺えるように、日の目を見ることがないまま、うやむやにされたようだ。激戦を制したイサキオス・コムネノスの権利を否定し、反乱者の陣営を分断するようなプランには、おそらく、首都内部の陰謀仲間ですら同調者が乏しかったであろうことは容易に想像でき、総主教も腹案を取り下げざるを得なかったのであろう。

そこで、彼は、自己の支持をイサキオス・コムネノスの陣営に最も高い値で売り付ける作戦へと方針を転換する。前述の通り、彼は、公正な調停者を装い、帝国の安寧にとって最も適正な方策として自ら裁断を下すことで、政権交代のキャスティングボードを握る存在としての彼の地位を大々的に誇示することに成功した。これに続いて、彼は、反皇帝派に号令をかけて武力で都を自身の権威の下に

まとめ上げ、事実上、「革命政権」の首班として権力をイサキオス・コムネノスに引き渡す役回りを果たした。それゆえ、イサキオスが政権を獲得する上で、彼は最大の貢献者に他ならず、その助力がなければ、イサキオスは正統な皇帝として都に歓呼の中で迎えられることはおろか、ボスフォラス海峡を安んじて渡ることすらできなかった、というのがケルラリオスの見解となる。この点は、イサキオス・コムネノスが皇帝に即位した後、両者の認識の違いとして早晚、顕在化するのだが、総主教ケルラリオスの言い分もまったく妥当性を欠いていたわけではないことは記憶に留めておきたい<sup>138</sup>。1057年9月1日のイサキオス・コムネノスの即位は、その意味で、彼が率いる小アジア軍事貴族の反乱軍と、首都で皇帝ミカエル6世を追い落とした総主教ミカエル・ケルラリオスの一党との共同作業が結実した成果だったのである。

## V 運命の分岐点—結びに代えて—

これまでの考察を振り返れば、レオン・トルニキオスの反乱とイサキオス・コムネノスとそれの明暗を分けた要因も、おのずと明らかになるのではなからうか。真っ先に目に入るのは、首都内部の政治勢力の対照的な反応である。トルニキオスの反乱の場合には、内部からこれに呼応して現政権を打倒しようという動きは、決して大きな流れにはならなかった。M.D.スパダーロは、この反乱においても、首都の内部に反乱軍と示し合わせて反皇帝プロパガンダに従事した連中がいたであろうことを論じている<sup>139</sup>が、結果として、そうした策動は大きな効果を生まぬまま、反乱は終息に向かったことはすでに目にした通りである。イサキオス・コムネノスの反乱では、総主教の加担が決定的な意味をもったことに鑑みれば、総主教以下の教会勢力が一貫して現政権支持の姿勢を貫いた点こそが、トルニキオスの反乱時に都で現政権に反抗する動きが顕在化しなかった最大の要因と言えるだろう。乱の終息後、修辞家ヨハネス・マウロプスは、この年のキリスト生誕祭に行った演説の中で、総主教ミカエル・ケルラリオスが「もう一人のモーセ」として、聖職者や民衆を率い、城壁沿いに練り歩いて敵の退散を祈ったことを感動的に語っている<sup>140</sup>。

では、なぜ、このケースでは、総主教は現職のコンスタンティノス9世の支持に奔走したのだろうか。理由は簡単である。それが彼の個人的利益に合致していたからだ。そもそも、先帝ミカエル4世に対する陰謀事件に連座して修道士になることを強いられた失意の彼を、総主教に抜擢したのは当時の皇帝コンスタンティノス9世だったのであり<sup>141</sup>、ケルラリオスにとっては恩義ある皇帝をわざわざ失脚させるような馬鹿げた真似など、想像もできなかったことだろう。

同様に、イサキオス・コムネノスの反乱時の総主教ケルラリオスの身の振り方についても、彼個人の利害関係から容易に説明することができる。コンスタンティノス9世時代の高官を次々と更迭した

テオドラ、およびその後継者のミカエル6世と総主教はそりが合わなかったことは前述した通りだが、今回の反乱は、そうした目障りな現職皇帝をお払い箱にする千載一遇の好機であった。しかも、反乱の首謀者たちは、彼同様、コンスタンティノス9世治下に重用された面々だったから、彼らが政権を取れば、かつて享受した自由な雰囲気存分に浸れることが期待できた。なかんずく、彼の姪婿であるコンスタンティノス・ドゥーカスを帝位に押し上げることができれば、彼には、新皇帝の後見役として、政権を牛耳ることすら夢見ることができたのである。先に見たとおり、事態はそこまで彼の思い通りには進まなかったものの、彼は、イサキオス・コムネノスの政権樹立に貢献することで、新皇帝に大いに恩を売り、新政権における十分な発言権を確保した。

次に、2つの反乱における軍隊の規律、結束力の問題を比較してみたい。

レオン・トルニキオスの反乱では、首都を説得によって開城させる試みが不首尾に終わると、まもなく反乱軍内部に動揺が広がり、トルニキオスは都から撤退することを強いられた。その後、皇帝を支持する小アジアの軍勢が姿を現すと、反乱軍の自壊現象は止まらなくなり、首謀者であるトルニキオスと盟友ヨハネス・ヴァタツェスを残して雲散霧消してしまったのはすでに目にした通りである。こうしたトルニキオスの軍隊の脆弱性は、先にも触れたように、首謀者のトルニキオスが現地軍の指揮を執った経験がなく、一般将兵が彼に個人的な忠誠心を抱きにくかったのが一因であろうが、兵の招集に際して、現職皇帝が死去し、トルニキオスが新たな君主に選ばれた、などと偽情報を流して兵を動員した結果、虚言がばれ、権力奪取の作戦に陰りが見えるや、一気に軍の瓦解が始まったのは自業自得と言うべきかもしれない。いずれにしても、このときの一般将兵に、己の身を危険にさらしてもトルニキオスへの忠誠を貫くような気概を求めるのは無理な相談だろう。別の言い方をすれば、反乱軍の本拠地アドリアノーブルから帝都コンスタンティノーブルは2、3日で移動できる距離だったから、こうした急ごしらえの軍勢でも、一気呵成に攻め上がれば、都を制することは可能である、と反乱軍首脳は考えた可能性はある。この点で反乱の成否は、いかに短時間で都を制圧するかにかかっていたのであり、その意味で、市内への突入を躊躇ったトルニキオスの判断は、やはり痛恨の失策と言うしかない。

これと比べると、イサキオス・コムネノスの軍の結束の固さは際立っている。先に見たように、軍内から戦意の乏しい連中の離脱を許した後だったことを差し引いても、その軍勢は、数的に優勢な皇帝軍を前にして怯むことなく、正面からそれに立ち向かい、激戦を制しうるだけの士気と戦闘力を発揮しているのは注目に値する。こうした強靱な組織力を裏打ちしたのが、歴戦の将軍たちと、彼らの本拠地に駐屯する軍隊との間に存在した太い連帯と信頼の紐帯であったのは、ほぼ間違いないところだろう。

皇帝ミカエル6世がそれ以上の抗戦を断念し、交渉に切り替えたのも、反乱軍の勝利抜きには考えられなかったことであり、彼らの軍事的圧力があって初めて、都の内部の反皇帝陰謀も大きなうねりとなりえたことも指摘されるべきであろう。そう見れば、今回の反乱の成功を、一義的に自らが行使した武力に帰そうとしているイサキオス・コムネノスの思いも分からなくはない。

結局のところ、反乱を成功させるためには、鉄の団結を誇る精強な軍隊と、首都内部の政治勢力、とりわけ総主教以下の教会人の積極的な呼応が必要条件となる、というのが結論となりそうである。もともと、皇帝政府が強力な軍隊を動員できなくなる11世紀後半には、第一の条件の比重は相対的に低下し、第二の条件も、反乱者の側が、首都の自発的な開城を期待しないときには決定的な条件とはならなくなることも想定されよう。ただし、それらの展望は本稿の射程を越えるものであり、その検証は当該時期の反乱を論じた別稿を期すことにしたい。

- <sup>1</sup> G. Ostrogorsky, *Geschichte des byzantinischen Staates*, 3. Aufl., München, 1963, S. 262-289. 邦訳: G・オストロゴルスキー(和田廣訳)『ビザンツ帝国史』、恒文社、2001年、413-456頁。S. Vryonis, Jr., *The Internal History of Byzantium during 'Time of Troubles' (1057-81)*, Ph. D. thesis, Harvard University, 1956, pp. 26-88; Id., "Byzantium: The Social Basis of Decline", *Greek, Roman and Byzantine Studies*, 2, 1959, pp. 159-175.
- <sup>2</sup> Anna Komnene, *Alexias*, ed., D. R. Reinsch & A. Kambylis, Berlin, 2001, p. 34. Anna Comnena, *Alexiade*, éd., B. Leib - P. Gautier, 4 vols, Paris, 1937-1976, vol. I, p. 36.
- <sup>3</sup> S. A. Kamer, *Emperors and Aristocrats in Byzantium, 976-1081*, Ph. D. thesis, Harvard University, 1983, pp. 258-271, 310-333; J.-C. Cheynet, *Pouvoir et contestations à Byzance (963-1210)*, Paris, 1990, pp. 59-61, 68-70, 338-344; J. Ferluga, "Aufstände im byzantinischen Reich zwischen den Jahren 1025 und 1081. Versuch einer Typologie", *Rivista di Studi bizantini e slavi*, 5, 1985, pp. 137-165, pp. 151-155. 我が国では、井上浩一氏が早くにイサキオス・コムネノスの反乱を分析している。井上浩一「コムネノス朝の成立—十一世紀ビザンツ帝国の政治体制—」『史林』57巻2号、1974四年、70-101頁、特に83-91頁。Id., "The Rebellion of Isaakios Komnenos and the Provincial Aristocratie Oikoi", *Byzantinoslavica*, 54, 1993, pp. 268-278. 拙稿で、これらの反乱を取り上げているのは以下の3篇である。根津由喜夫「ビザンツ貴族と皇帝政権—コムネノス朝安定化へ過程—」、『史林』71巻3号、1988年5月、1-40頁、特に16-21頁；同「十一世紀ビザンツ属州貴族と地域社会—アドリアノーブルとマケドニア貴族をめぐって—」『歴史学研究』652号、1993年10月、46-59頁、特に49-50頁；Id., "The Revolt of Isaakios Komnenos: Reconsideration", *Orient*, 41, 2006, pp. 41-60.
- <sup>4</sup> この点で、11世紀中葉の大規模な反乱の先駆けとなった1042年のゲオルギオス・マニアケスの事例は、これら2つの反乱と構造を異にしている。マニアケスの場合は、彼の所領のあった小アジア、テマ・アナトリコイではなく、彼が遠征軍の司令官として派遣されていた南イタリアで挙兵している。つまり、それは、貴族が、自身の属する地域社会の支援を背景に起こした反乱ではなく、外地に派遣された将軍が配下の軍隊の支持を得て開始した軍隊反乱だった。今回、マニアケスの反乱を考察の対象に含めなかったのは以上の理由による。なお、こ

の反乱事件については、さしあたり S. A. Kamer, *Emperors and Aristocrats*, pp. 250-255 を参照のこと。

<sup>5</sup> 3人の史家の校訂版は以下の通り。Michael Psellos, *Chronographie*, éd., E. Renauld, 2 éd., Paris, 1967, 2 vols.; Michael Attaleiates, *Historia*, ed. I. Bekker, Bonn, 1853; Ioannes Skylitzes, *Synopsis Historiarum*, ed., H. Thurn, Berlin, 1973。プセルロスには以下の英訳、スキュリツェスには仏訳がある。Michael Psellus, *Fourteen Byzantine Rulers*, Translated by E. R. A. Sewter, Harmondsworth, 1966; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, Text traduit par B. Flusin et annoté par J.-C. Cheynet, Paris, 2003。

<sup>6</sup> Г. Г. Литаврин, *Советы и рассказы Кекамена*, Москва, 1972, стр. 268。

<sup>7</sup> K. Inoue., “The Rebellion of Isaakios Komnenos and the Provincial Aristocratie Oikoi” (註3参照)。

<sup>8</sup> Michael Attaleiates, p. 22。

<sup>9</sup> Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 438f; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 365。

<sup>10</sup> 以下の記述は、Michael Psellos, éd., E. Renauld, II, pp. 14-17 を参照。

<sup>11</sup> Michael Psellos, éd., E. Renauld, II, p. 16。この箇所の前段では、プセルロスは、マケドニア人に関し、危険思想の持ち主で、二枚舌を弄し、本心を隠して仲間内の陰謀計画に熱心に取り組む連中である、と嫌悪感を露わにしている。*ibid.*, p. 16。ただし、マケドニアの軍人が常に中央政府に対して反乱の機会を窺っていた、という認識は、必ずしも事実関係と一致していないように思われる。ことによると、いささか偏見を含んだプセルロスのマケドニア人観は、彼が史書を執筆していた1070年代において、彼が深く関与したドゥーカス家の政権に反抗的だったマケドニア地域勢力の動向に左右されていた可能性もあるだろう。ビザンツの歴史叙述における「マケドニア人」のイメージに関しては、D. C. Smythe, “Macedonians in Eleventh- and Twelfth-Century Byzantine Historiography”, in J. Burke and R. Scott eds., *Byzantine Macedonia: Identity, Image and History. Papers from the Melbourne Conference July 1995*, Melbourne, 2000, pp. 69-78 を参照。

<sup>12</sup> J. Lefort, “Rhétorique et politique: Trois discours de Jean Mauropous en 1047”, *Travaux et Mémoires*, 6, 1976, pp. 265-303。マウロプスのテキストの校訂版は、P. de Lagarde, *Johannis Euchaitorum metropolitae quae in codice Vaticano graeco 676 supersunt*, *Abhandlung der hist-philol. Klasse der Königl. Gesellschaft d. Wissenschaft zu Göttingen*, 28, 1882。

<sup>13</sup> Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 439; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 365。

<sup>14</sup> Michael Psellos, éd., E. Renauld, II, p. 17。

<sup>15</sup> Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 441; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 367。4名のうち、ヴァタツェスを除く3つの家名はこの箇所が史料上の初出である。ヴァタツェス家の成員が史料に初めて登場するのは、10世紀末に遡る。Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 343; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 287。なお、12世紀にはコムネノス朝と深く結び付き、政権の一翼を担ったこの家系の台頭について、より詳しくは、J. S. Langdon, “Backgrounds to the Rise of the Vatazai to Prominence in the Byzantine Oikoumene 997-1222”, in J. S. Langdon, S. W. Reinert J. S. Allen and Ch. P. Ioannides eds., *To Ελληνικόν: Studies in Honor of Speros Vryonis. Jr.*, vol. I, New Rochelle, NY, 1993, pp. 179-210 を参照のこと。

<sup>16</sup> Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 441; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 367; Michael



Attaleiates, p. 29.

- 17 次章で詳述するように、ストラボミュテス以下の3名は東方から皇帝を支持する軍勢が到着するとトルニキオスを見捨てて皇帝方に帰順し、自らの地位と財産を保全することに成功した。これに対して、ヴァタツェスは最後までトルニキオスと行動を共にしている。もちろん、反乱計画へのコミットメントの度合いが反乱の最終局面での彼らの行動を左右した、という見解は仮説に過ぎず、それは単に保身を図る個々人の思惑やトルニキオスに対する親密さの度合いなど、単純な個人的ファクターに還元しうる可能性も捨てきれない。
- 18 G. Schlumberger, *Sigillographie de l'empire byzantin*, Paris, 1884 (rep. Torino, 1963), p. 626; A.-K. Wassiliou und W. Seibt, *Die byzantinischen Bleisiegel in Österreich*, vol. II, Wien, 2003, S. 279-280.  
「マリアノス」という個人名は、彼以外のブラナス家の成員に確認されていないため、印章の持ち主とトルニキオス反乱の参加者が同一人物であることはほぼ間違いないところであろう。
- 19 I. Jordanov, *Печатите от стратегията в Преслав (971-1088)*, София, 1993, стр. 166-167.
- 20 G. Schlumberger, *Sigillographie de l'empire byzantin*, pp. 363, 713; I. Jordanov, "Byzantine Lead Seals from the Village of Melnitsa", in W. Seibt ed., *Studies in Byzantine Sigillography*, 7, Washington. D. C., 2002, pp. 21-57, p. 40f; I. Barnea, "Les sceaux byzantins mis au jour à Novidonum", in N. Oikonomides ed., *Studies in Byzantine Sigillography*, 2, Washington. D. C., 1990, pp. 153-161, p. 159; R. Guiland, "Curopalate", *Byzantina*, 2, 1970, pp. 187-249, p. 223.
- 21 J. S. Langdon, "Backgrounds to the Rise of the Vatazai to Prominence", p. 180 and n. 15.
- 22 G. Schlumberger, *Sigillographie de l'empire byzantin*, p. 363; I. Jordanov, "Byzantine Lead Seals from the Village of Melnitsa", p. 40.
- 23 たとえば、11世紀中葉にロマノス・スクレロスは、自己の印章の意匠を聖ゲオルギオスから大天使ミカエルに変更したことが知られている。cf. W. Seibt, *Die Skleroi. Eine prosopographisch-sigillographische Studie*, Wien, 1976, Nr. 18, S. 76-85.
- 24 さらに想像を逞しくすれば、ポリュスは結局、皇帝方に帰順し、キャリアを継続させることに成功しているから、パトリキオスへの昇進は今回の反乱事件以後の出来事であった可能性も残るだろう。
- 25 Michael Attaleiates, p. 22.
- 26 逆に反乱勃発時にヨハネス・ヴァタツェスがヴェステスの地位にあったとすれば、位階的にトルニキオスと同格になり、あえて後者を対立皇帝に担ぎ出す必要性は低下するように思われる。この点も、ヴェステスの印章の持ち主が今回の反乱者とは別人だったことの傍証になるであろう。
- 27 前述したように、トルニキオスを支持する4人の有力者のうち、3人の家系が今回、史料初出の新興家系であり、ヴァタツェス家でも10世紀末までしか遡らなかった。これに対して、小アジア東部タロン地方のアルメニア系王族の後裔であるトルニキオス家は10世紀前半にビザンツ宮廷に定着している。963年の内乱時にはトルニキオス家のレオンとニコラオスの兄弟がマケドニア人部隊を指揮しているから、この時期までに西方属州への同家の定着が進んでいたと考えられる。Leon Diaconus, *Caloënsis Historiae libri decem*, ed., C. B. Hase, p. 45; A.-M. Talbot and D. F. Sullivan, Introduction, translation, and annotations, *The History of Leo the Deacon*:

*Byzantine Military Expansion in the Tenth Century*, Washington, D. C., 2005, p. 95 and n. 48; cf. J.-C. Cheynet, *Pouvoir et contestations*, p. 220.

<sup>28</sup> Michael Psellos, éd., E. Renauld, II, p. 17.

<sup>29</sup> J.-C. シェネは、現在、ジュネーヴ博物館に収蔵されているビザンツ時代の十字架に刻まれた「西方のドメスティコス、マケドニア人のプロタルケス、レオン」という銘文に関して、ここで言及された人物をレオン・トルニキオスと同定し、彼が反乱以前に西方軍の総司令官の地位を経験していたことを推定した。J.-C. Cheynet, “Nouvelle hypothèse à propos du domestique d’Occident cité sur une croix du Musée de Genève”, *Byzantinoslavica*, 42, 1981, pp. 197-202. これに対して、L. ブーラスは、この十字架で銘記された人物を、ニケフォロス2世フォーカス帝(在位963-969)の弟で西方のドメスティコス・トーン・スコロン職を務めたレオン・フォーカスに帰し、W. ザイブトは人物の同定には慎重な態度を維持しつつ、ひとつの可能性としてレオン・サラケノプロスの名を挙げるなど、この人物の素性についてはまだ定説がないのが実情である。それゆえ、この十字架を根拠に、レオン・トルニキオスの西方のドメスティコス職就任を推定するのは早計であろう。cf. L. Bouras, “The Reliquary Cross of Leo Domestikos tes Dyseos”, in M. Mullet and R. Scott eds., *Byzantium and the Classical Tradition: University of Birmingham Thirteenth Spring Symposium of Byzantine Studies 1979*, Birmingham, 1981, pp. 179-187; W. Seibt, “Das Reliquiarkreuz des Leon “Damokranites”, πατρικιος και δομειστικος της Δύσεως”, in *Bužánvuo. Festschrift für Herbert Hunger zum 70. Geburtstag*, Wien, 1984, S. 301-310.

<sup>30</sup> Michael Psellos, éd., E. Renauld, II, p. 18.

<sup>31</sup> たとえば、歴戦の将軍で当時、東方の要衝アンティオキアの長官職を務めていたカタカロン・ケカウメノスはその職を解かれ、後任のアンティオキア長官には皇帝の甥ミカエル・ウラノスが就いた。Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 483; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 398.

<sup>32</sup> Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 486; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 401.

<sup>33</sup> Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 483; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 398f.

<sup>34</sup> Michael Attaleiates, p. 56. ここから、スキュリツェスが爵位の序列に従って、高位のものから順番に名前を列挙していることが分かる。コンスタンティノス・ドゥーカスの弟ヨハネスの当時の爵位は不明だが、常識的に考えて、兄よりも上位にあったと考えるのは難しいだろう。

<sup>35</sup> これと相前後してマギストロスへの昇進を求めたフランク人傭兵隊長エルヴェ・フランゴブーロスの要求も拒絶されている。Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, pp. 484, 486f; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, pp. 399f. シェネが指摘するように、皇帝に即位する以前にロゴテテース・トゥ・ストラティオーティクウ、すなわち軍隊財務を統括する官庁の長官を務めていたミカエル6世は、軍隊が国家財政に大きな負担となっていることを痛感していたようである。とりわけ、爵位の引き上げは、公務からの引退後も生涯にわたって支給される年金の増大を意味したから、いっそう慎重な態度が示されたことは想像に難くない。これもシェネが指摘していることだが、ミカエル6世に忠実だった軍人でも、小アジアの重要な司令官職にあるリュカンテス、フランク人傭兵隊長のランドウルフの両名ともパトリキオスの爵位に留まっているところから見て、同帝治下の軍人に対する緊縮策は、単純な反対派に対する嫌がらせ、というより、全般的な財政政策の一環として捉え

るべきかもしれない。J.-C. Cheynet, “La politique militaire byzantine de Basile II à Alexis Comnène”, *Zbornik radova Vizantološkog Instituta*, 29-30, 1991, pp. 61-74, p. 68f; Id., *Pouvoir et contestations*, p. 342. また、ミカエル6世政権下で西方属州軍のトップにあったと思われるバシレイオス・タルカネイオテスでも、現存する印章資料から判断する限りでは、イサキオス・コムネノスやケカウメノスと同格のマギストロスに達しているに過ぎない。I. G. Leontiades, *Die Tarchaneiotai: Eine prosopographisch-sigillographische Studie*, Thessaloniki, 1998, p. 39f.

<sup>36</sup> プロートシュンケルロス is 総主教の顧問官を意味したから、本来は高位の聖職者が帯びる称号である。cf. N. Oikonomidès, *Les listes de préséance byzantines des IX<sup>e</sup> et X<sup>e</sup> siècles*, Paris, 1972, p. 308. レオン・ストラボスポンデュロスは、史料によっては「パラスポンデュロス」と表記されている場合もある。「ストラボ-」という形容辞は「すがめの」という個人的容貌に基づく異名と考えられるから、彼の本来の家名は、同時代に複数の高官を輩出している「スポンデュロス」であった公算が高い。cf. Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 394, n. 6.

<sup>37</sup> Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, pp. 483, 486f; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, pp. 398, 401.

<sup>38</sup> Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 487; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 401.

<sup>39</sup> ブリュエンニオスはミカエル6世の前任者、女帝テオドラの治下に没収されていた財産の返還を皇帝に求めたが、それを拒絶されたため、復讐の機会を窺っていたのである。Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 484f; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 399.

<sup>40</sup> Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 487; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 401f.

<sup>41</sup> Michael Psellos, éd., E. Renauld, II, p. 136.

<sup>42</sup> プセルロス自身が語るところによれば、彼とコンスタンティノス・ドゥーカスの親交は、コンスタンティノス9世モノマコスの治下に、皇帝の仲介でプセルロスがドゥーカスの首都の館を譲り受けたことで始まった。その後はドゥーカスの長子ミカエルの師父役をプセルロスが務めるなど、生涯にわたって親密な関係が続いている。Michael Psellos, éd., E. Renauld, II, p. 142.

<sup>43</sup> Michael Psellos, éd., E. Renauld, II, p. 142.

<sup>44</sup> この点に関しては、本稿IV章の記事を併せて参照のこと。

<sup>45</sup> 註7を参照。

<sup>46</sup> Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 483; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 399.

<sup>47</sup> Michael Psellos, éd., E. Renauld, II, p. 136. この時期、家系の古さ、名家に属することを支配エリートが積極的に喧伝するようになったことについては、A. P. Kazhdan and A. W. Epstein, *Change in Byzantine Culture in the Eleventh and Twelfth Centuries*, Berkley - Los Angeles, 1985, pp. 102-110を参照のこと。J.-C. シェネも、ケカウメノス対立皇帝の地位を辞退したのは、出自においてコムネノスに劣る彼が有力な門閥貴族たちを統率するのは困難なことを予想しての判断だった、と想定している。J.-C. Cheynet, *Pouvoir et contestations*, p. 340, n. 12.

- 48 Michael Psellos, éd., E. Renauld, II, p. 85.
- 49 コムネノス家の起源を巡る議論については、さしあたり、拙稿「コムネノス家—十一世紀ビザンツ軍事貴族家門の相貌—」、『金沢大学文学部論集 史学・考古学・地理学篇』20号、2000年3月、1-41頁、特に4-7頁を参照のこと。
- 50 cf. C. Holms, *Basil II and the Governance of Empire (976-1025)*, Oxford, 2005, p. 235.
- 51 イサキオスの経歴については、前掲拙稿「コムネノス家」8頁を参照。なお、「東方のストラトペダルケス」は、さらに上位の「東方のドメスティコス」が不在の場合には東方戦線の最高司令官に等しかったから、同職への在任時、イサキオスは事実上、東方駐屯軍全体を統括する地位にあったと考えられる。
- 52 イサキオスの甥アレクシオス(後のアレクシオス1世)が1070年代にカスタモンのコムネノス館を訪れた際、それを彼の父、ないしは伯父の館ではなく、彼の祖父の館と呼んでいることを根拠に、シェネは、イサキオス・コムネノスがこの館に常住していなかったのは明らかである、と語っている。J.-C. Cheynet, *Pouvoir et contestations*, p. 341, n. 21.
- 53 Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 406f; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 336f.
- 54 カタカロン・ケカウメノスの経歴は、A. Savvides, “The Byzantine Family of Kekaumenos (Cecaumenos) (Late 10<sup>th</sup>-Early 12<sup>th</sup> Century)”, *Diptycha*, 4, 1986-1987, pp. 12-27, esp. p. 21-26を参照。ただし、筆者は、ペチェネグ戦に参加し、重傷を負ったケカウメノスを同名異人と推定するサツヴィデスの説には与しない。
- 55 バルティキアンは、ケカウメノス家を、当初は小アジア北東部、タイク地方に基盤を有し、同地方がビザンツに併合されたのを機に帝国に奉仕するようになったアルメニア系の家系と想定している。H. Bartikian, “La généalogie du magistros Bagarat, catépan de l’Orient, et des Kékauménos”, *Revue des études arméniennes, Nouvelle série*, 2, 1965, pp. 261-272.
- 56 かつてG.バックラーが唱えた著述家ケカウメノスと彼を同一視する説を支持する者は、今日ではほとんどいないようである。cf. G. Buckler, “Authorship of the *Strategicon* of Cecaumenos”, *Byzantinische Zeitschrift*, 36, 1936, pp. 95-121. 井上浩一「ケカウメノス『ストラテギコン』」(上)、『人文研究』(大阪市立大学)38巻13分冊、1986年、25-57頁、特に34-46頁も併せて参照のこと。
- 57 Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 490; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 404.
- 58 D. I. Polemis, *The Doukai. A Contribution to Byzantine Prosopography*, London, 1968, p. 8, n. 2.
- 59 Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 396; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 328(コンスタンティノス・ドラッセノスの娘婿としてのコンスタンティノス・ドゥーカス); A. Sideras, *Die byzantinischen Grabreden. Prosopographie, Datierung, Überlieferung 142 Epitaphien und Monodien aus dem byzantinischen Jahrtausend*, Wien, 1994, S. 138-140. (ヨハネス・ドゥーカスの妻がニケタス・ペゴニテスの娘だったことについて)
- 60 Michael Attaleiates, p. 56. ケマーは、反乱の謀議が聖ソフィアでなされたことに関し、総主教がまったく関知していなかったはずのないことを指摘している。S. A. Kamer, *Emperors and Aristocrats*, p. 314.
- 61 Michael Psellos, éd., E. Renauld, II, p. 134.

- 62 ブルツェス家のプロソポグラフィー研究は、J.-C. Cheynet, “Trois familles du duché d’Antioche”, dans J.-C. Cheynet-J.-F. Vannier, *Études prosopographiques*, Paris, 1986, pp. 15-55.
- 63 *ibid.*, p. 32.
- 64 Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 488; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 402.
- 65 Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 488; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 402f. ボタネイアテスについては、ここでは苗字しか記されていないが、それが、後に皇帝となるニケフォロス・ボタネイアテスであることは、その後のスキュリツェス自身の記述やアッタレイアテスのそれから確認できる。
- 66 スクレロス家のプロソポグラフィー研究は、W. Seibt, *Die Skleroi. Eine prosopographisch-sigillographische Studie*, Wien, 1976を参照。
- 67 *ibid.*, p. 77-80.
- 68 註66に同じ。
- 69 J. Shepard, “A Suspected Source of Scylitzes’ *Synopsis historion*: the Great Catacalon Cecaumenos”, *Byzantine and Modern Greek Studies*, 16, 1992, pp. 171-181.
- 70 Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 427; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 355.
- 71 この家門に関しては、以下のプロソポグラフィー研究を参照されたい。J. F. Vannier, *Familles byzantines: Les Argyroi (IX-XII siècles)*, Paris, 1975; J.-C. Cheynet-J.-F. Vannier, “Les Argyroi”, *Zbornik radova Vizantološkog Instituta*, 40, 2003, pp. 57-90.
- 72 シェネとヴァニエは、最新のアルギュロス家に関する論考において、印章のみから知られるパトリキオスのボトス・アルギュロスとプロートスパタリオス、ニケフォロス・アルギュロスが今回の謀反に加わった兄弟であった可能性があることを指摘している。J.-C. Cheynet-J.-F. Vannier, “Les Argyroi”, p. 76f. もとより、それは、論証不能の仮説でしかないが、仮にそれを受け入れた場合、両人の帯びた爵位が他の参加者と比べてかなり低い点が目を引く。この後も同家の成員が中央政界で浮上できなかった要因のひとつとして、反乱に加わったアルギュロス家の成員が同輩たちの中で相対的に劣位に留まったことが関係しているのかもしれない。
- 73 ボタネイアテス家に関する総合的なプロソポグラフィー研究は未だ公開されていない。さしあたっては、S. A. Kamer, *Emperors and Aristocrats*, p. 108, 241; A. Kazhdan, “The Aristocracy and the Imperial Ideal” in M. Angold ed., *The Byzantine Aristocracy IX-XIII Centuries*, Oxford, 1984, pp. 43-57, esp. p. 45f; C. Holms, *Basil II and the Governance of Empire*, p. 235などを参照のこと。
- 74 Michael Attaleiates, p. 56. 彼の歴任官職は、G. Zacos and A. Vegler, *Byzantine Lead Seals*, Basel, 1972, pp. 1463-1465に復元されている。
- 75 シェネは、このレオンを、1044年頃、南イタリア、カラブリアのストラテegosを務めた某アンティオコスと同定している。J.-C. Cheynet, *Pouvoir et contestations*, p. 341, n. 24. cf. M. Loukaki, “Contribution à l’étude de la famille Antiochos”, *Revue des études byzantines*, 50, 1992, pp. 185-205, p. 188f.
- 76 Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 343; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 287.
- 77 この日付はアッタレイアテスによって伝えられている。Michael Attaleiates, p. 22.

- <sup>78</sup> トルニキオスが楯に乗って歓呼されたことはプセルロスのみが報じている。Michael Psellos, éd., E. Renauld, II, p. 18. 楯乗りは、背教者ユリアヌスから7世紀初頭のフォーカスまで、しばしば軍隊によって擁立された皇帝の即位儀礼として実施されたが、その後はそうした慣行は失われたようである。ここで、こうした儀礼が復活しているのは、軍隊こそが新たな皇帝が生み出す原動力たることを示すためのデモンストレーションであろうか。
- <sup>79</sup> プセルロスの証言によれば、皇帝としての歓呼を受けた後、トルニキオスは、軍内の主だった人々の役割分担を定め、軍司令官や司令部の幕僚、評定方などに任命したという。おそらく、そこでは、来るべき彼の政権の大きな枠組みが定められたのであろう。 *ibid.*, p. 18.
- <sup>80</sup> Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 439; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 365.
- <sup>81</sup> Michael Psellos, éd., E. Renauld, II, p. 19; Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 439; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 365.
- <sup>82</sup> Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 440; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 366. このときの皇帝軍の中核を占めたのがアラブ人衛兵隊だったことはアッタレイアテスによって、それに元老院議員の武装させた従者が加わったことは上記のスキュリツェスの証言によって、さらに囚人が動員されたことはプセルロスによって報じられている。Michael Attaleiates, p. 24; Michael Psellos, éd., E. Renauld, II, p. 23.
- <sup>83</sup> Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 440; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 366. アルギュロスは、11世紀初頭に南イタリア、パリーでビザンツ支配に対する反乱を主導したメレスの息子。反乱終息後、人質としてコンスタンティノーブルに送られ、皇帝宮廷に滞在、この時期には爵位もマギストロスに達してコンスタンティノス9世の腹心的な地位にあった。cf. V. von Falkenhausen, *Untersuchungen über die byzantinische Herrschaft in Süditalien vom 9. bis ins 11. Jahrhundert*, Wiesbaden, 1967, S. 93-94. コンスタンティノス・レイクデスはコンスタンティノス9世の側近で、この時期、実質的に国政を主導していた。Michael Psellos, éd., E. Renauld, II, p. 58f.
- <sup>84</sup> Michael Psellos, éd., E. Renauld, II, p. 23.
- <sup>85</sup> Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 440f; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 366f; Michael Attaleiates, pp. 24-28; Michael Psellos, éd., E. Renauld, II, pp. 23-25.
- <sup>86</sup> Michael Psellos, éd., E. Renauld, II, p. 25.
- <sup>87</sup> トルニキオスが帝都前面から退去することを決めた一因は、味方の裏切りで彼の身柄が皇帝方に引き渡されることを危惧したためだった、とスキュリツェスは語っている。Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 441; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 367. なお、トルニキオスの退去先に関して、スキュリツェスはアルカディウポリス、アッタレイアテスはテルモポリスの名を挙げている。Michael Attaleiates, p. 28. これは、いずれかが正しい、という問題ではなく、トルニキオスが宿所を移動させていった結果と解釈すべきであろう。テルモポリスはコンスタンティノーブルの西郊、アルカディウポリスは帝都とアドリアノーブルのほぼ中間点だから、前者でトルニキオスは後述のライデストス攻撃部隊を分派した後、後者に本営を置くことを考えていたのかもしれない。2つの都市の位置については、A. Külzer, *Ostthrakien (Eurōpē)*, Tabula imperii

byzantini 12, Wien, 2008, S. 264-267, 675.を参照。

<sup>88</sup> Michael Psellos, éd., E. Renauld, II, p. 27.

<sup>89</sup> Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 441; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 367. ライデストスを守るヴァタツェスは「トルニキオスの親族」と報じられているが、反乱軍の主要メンバー、ヨハネス・ヴァタツェスの縁者であることは間違いないだろう。他方、ブルガリア人部隊との交戦はアッタレイアテスのみが伝えている。Michael Attaleiates, p. 29. この部隊は、スコピエ帯を管区とする属州「ブルガリア」のそれと考えられる。

<sup>90</sup> イアシテス家は11世紀初頭に登場する貴族家門。ミカエル・イアシテスは1039年にヴェステス、イベリアのカテパノとして史料に初出する。Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, pp. 402, 435f; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 333, 362. 彼は一貫して東部国境地帯の軍指揮官としてキャリアを積んでおり、今回も、東部戦線で作戦行動中の麾下の軍勢を率いての転戦だった。この人物の経歴については、I. Jordanov, *Corpus of Byzantine Seals from Bulgaria*, Vol. I, Sofia, 2003, no. 6.1, p. 34f.も参照。

<sup>91</sup> Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 441f; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 367f; Michael Attaleiates, p. 29f. ブルガロフュゴンはアドリアノーブル南東52キロ、コンスタンティノーブルに向かう街道上の小都市。cf. P. Soustal, *Thrakien (Thrakē, Rodopē und Haimimontos)*, Tabula imperii byzantini 12, Wien, 1991, S. 223-224.

<sup>92</sup> 爵位はパトリキオス。「ピシディヤ人とリュカオニア人の司令官」とは、アナトリコイの長官と同義と思われる。彼は全く無名の家門の出自であり、彼以外の同族は知られていない。cf. J.-C. Cheynet, *Pouvoir et contestations*, p. 342 et n. 28.

<sup>93</sup> Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 487f; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 402.

<sup>94</sup> Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 487f; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 402f.

<sup>95</sup> Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 489; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 403.

<sup>96</sup> Michael Psellos, éd., E. Renauld, II, p. 85.

<sup>97</sup> Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 492; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 405.

<sup>98</sup> Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 492; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 405.

<sup>99</sup> ゲオルギオス・マニアケスとロマノス・スクレロスアナトリコイ内に隣接する所領を有しており、両者の対立はしばしば武力衝突に発展した。1042年、マニアケスは任地の南イタリアで反乱の兵を挙げるが、それは、ロマノス・スクレロスが皇帝コンスタンティノス9世の愛顧を楯にマニアケス不在中の後者の所領を襲撃し、掠奪をはたらいたことが直接の原因だった、と伝えられている。Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 427f; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 355.

<sup>100</sup> ミカエル・プセルロスは、皇帝ミカエル6世から反乱への対処法を下問され、不仲だった総主教との和解を図ること、叛徒に使節を送って金銭の提供と将来の栄達を約束して反乱軍の解散を促すこと、軍を召集して反乱軍に軍事的に対抗できるようにすること、の3つの助言をおこなった、と自身の史書の中で述べている。これに対して皇帝は第1の提言はなおざりにして、2番目と3番目のそれのみを実施したが、2番目の策は実りのないま

まに終わったという。Michael Psellos, éd., E. Renauld, II, p. 88f.

- <sup>101</sup> Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 479; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 395. cf. K.-P. Todt, “Die Frau als Selbstherrscher: Kaiserin Theodora, die letzte Angehörige der makedonischen Dynastie”, *Jahrbuch der österreichischen Byzantinistik*, 50, 2000, S. 139-171, S. 162.
- <sup>102</sup> 彼はヴァスプラカンのカテパノ(1046/47-1048)、エデッサのドゥクス(1050頃)、アニのドゥクス(1055-1057)を歴任している。cf. H.-J. Kühn, *Die byzantinische Armee im 10. und 11. Jahrhundert. Studien zur Organisation der Tagmata*, Wien, 1991, S. 194, 201, 204. この間、ヴァスプラカン長官在任時にはアニとイベリアの長官だったカタカロン・ケカウメノスと共にトルコ人との戦闘に従事しており、両人は旧知の間柄だった。Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, pp. 448-453; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, pp. 373-376.
- <sup>103</sup> タルカネイオテス家のプロソポグラフィ研究は、I. G. Leontiadès, *Die Tarchaneiotai: Eine prosopographisch-sigillographische Studie*, Thessaloniki, 1998を参照。
- <sup>104</sup> Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 494f; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 407.
- <sup>105</sup> J. Nesbitt-N. Oikonomides ed., *Catalogue of Byzantine Seals at Dumbarton Oaks and in the Fogg Museum of Arts*, vol. III, Washington D. C., 1996, no. 99.9, p. 176. シェネも、皇帝軍の陣立てについて同様の見解を示している。J. -C. Cheynet, *Pouvoir et contestations*, p. 340.
- <sup>106</sup> Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 488; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 402.
- <sup>107</sup> Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, pp. 494-496; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 407f.  
この戦いで皇帝側ではプニミオス、マウロカタカロス、カツァムーンテスといった将軍が戦死した。後の2人はこの箇所ですべて初めて登場するが、タルカネイオテス配下の西方軍の部将と思われる。スキュリツェスは、反乱軍内の戦死者としては、レオン・アンティオコスの名のみを挙げている。この人物については本稿、註75を参照されたい。
- <sup>108</sup> Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 497; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 408. これに対して、プセルロスは、2度目の軍事作戦に反対したのは皇帝軍の最高司令官を務めたテオドロスだったこと、彼がそうしたのは成算がなかったためではなく、すでに彼が秘かにコムネノス陣営と通じていたためだ、と報じている。Michael Psellos, éd., E. Renauld, II, p. 91.
- <sup>109</sup> Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 496; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 408.
- <sup>110</sup> Michael Psellos, éd., E. Renauld, II, pp. 91-94.
- <sup>111</sup> テオドロス・アロープス自身はコンスタンティノーブルの生まれだったが、彼の一族はロードス島の出身で、同地に相当な所領を有していたという。cf. E. Malamut, *Les îles de l'empire byzantin*, 2 vols, Paris, 1988, vol. II, p. 506.
- <sup>112</sup> Michael Psellos, éd., E. Renauld, II, pp. 93-105.
- <sup>113</sup> Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 496f; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 408.
- <sup>114</sup> Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 497; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 409.
- <sup>115</sup> Michael Psellos, éd., E. Renauld, II, pp. 105-107.



- 116 プセルロスのこうした一連の発言は、彼が当該事件に深く関与した当事者であるだけに慎重に吟味する必要があるだろう。ただ、反乱軍の中心メンバーで、帝都の政治工作の一翼を担っていた公算の高いコンスタンティノス・ドゥーカスと彼が親密な関係にあり、この後、成立したイサキオス1世の政権でもプセルロスが皇帝側近の地位を得たことを思えば、帝都の陰謀計画をまったく知らなかったと考えるのは困難なように思われる。
- 117 井上浩一「コムネノス朝の成立－11世紀ビザンツ帝国の政治体制－」、『史林』57巻2号、1974年、70-101頁、特に84-87頁の議論を参照。
- 118 プセルロスが報じるところによれば、反乱軍が一致して皇帝側の申し入れを受け入れたのは、イサキオス・コムネノスが自分のこと以上に僚友たちへの配慮を示していたことが分かったためであるという。この箇所からも、反乱参加者の最大の関心事が私的利益の拡大にあったことが裏打ちされるように思われる。Michael Psellos, éd., E. Renauld, II, p. 104.
- 119 Michael Psellos, éd., E. Renauld, II, p. 105.
- 120 Michael Psellos, éd., E. Renauld, II, p. 106.
- 121 拙稿「ビザンツ貴族と皇帝政権－コムネノス朝安定化への過程－」、『史林』71巻3号、1988年、1-40頁、特に20頁。
- 122 渡辺金一『コンスタンティノーブル千年』、岩波新書、1985年、182-183、219頁。
- 123 同上、178-179頁。
- 124 同上、94-95頁。
- 125 以下の事実関係の記述は、特に註記がない限り、Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, pp. 497-500; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, pp. 409-411に拠る。
- 126 コンスタンティノーブルの騒乱が発生した日付は史料には明示されていない。それを8月30日とするのは、騒乱は一日で皇帝ミカエル6世を退位させることに成功し、翌日夕方にイサキオス・コムネノスが都に到着、さらに翌日の9月1日に戴冠式をあげた、というスキュリツェスの記述から逆算した結果である。cf. J. Shepard, "Isaakios Comnenus' Coronation Day", *Byzantinoslavica*, 38, 1977, pp. 22-30, esp., p. 28, n. 41.
- 127 ここに登場する「ヘタイレイアの全てのアルコンテス」の正体に関しては論争がある。ヴリョニスは、それを、首都の同業組合(ギルド)の指導層と見なす一方で、ティンネフェルトらは皇帝親衛隊の将校たちと同定している。Sp. Vryonis Jr., "Byzantine Αντιοκρατία and the Guilds in the Eleventh Century", *Dumbarton Oaks Papers*, 17, 1963, pp. 289-314, esp. p. 309, n. 84; E. Tinnefeld, "Michael I. Kerullarios, Patriarch von Konstantinopel(1048-1058). Kritische Überlegungen zu einer Biographie", *Jahrbuch der österreichischen Byzantinistik*, 39, 1989, S. 95-127, S. 121. 我が国では、渡辺金一氏がギルド説を採っている(註123参照)。井上浩一氏は、前掲の1974年の論文ではこれを、「皇帝の親衛隊の長を指すのか、あるいは市民団体の長を指すのか不明」と述べて態度を保留する一方で、1976年の論文では、論拠は明らかでないが、「ギルドの長」の参加を明言しており、渡辺氏同様、ヴリョニスの解釈を踏襲しているようである。井上浩一「コムネノス朝の成立」、90頁 註16、同「11世紀コンスタンティノーブルの「市民闘争」」、『人文研究』28巻9号、1976年、39-69頁、特に59頁。
- 128 ミカエルは1042年にパトリキオスかつデュラキオン長官、1048年にバリストリオン長官を務めている(後者の

ポストの前任者はカタカロン・ケカウメノスだった)。Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, pp. 424, 456; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 353, 378. 高級文官職に就いている父親の経歴を見れば、彼の家系は生粋の軍事家門とは見なせないが、シェネの言うように、「ミカエルは、コンスタンティノス9世に仕え、パラスボンデュレスによって遠ざけられた将軍たちに属していた」点で、反乱軍を支持するのに十分の理由があった。J.-C. Cheynet, *Pouvoir et contestations*, p. 342.

<sup>129</sup> クリュセリオス家の祖ヨハネスは、10世紀後半、デュラキオンで事実上、独立君侯の地位を占めていたが、その後、皇帝バシレイオス2世に降伏し、爵位を授けられてビザンツ宮廷に迎えられている。G. N. Nikolov, “The Bulgarian Aristocracy in the War against the Byzantine Empire”, in G. Prinzing, M. Salamon & P. Stephenson ed., *Byzantium and East Central Europe*, Cracow, 2001, pp. 141-158, p. 154f. スティーブソンによれば、デュラキオン長官ミカエルのセルビア人に対する軍事作戦はクリュセリオス家の協力の下で実行されたという。P. Stephenson, *Byzantium's Balkan Frontier. A Political Study of the Northern Balkans, 900-1204*, Cambridge, 2000, p. 134. この所説が受け入れられるのであれば、ミカエルとテオドロス・クリュセリオスの親交もこの時期まで遡れるであろう。ただし、印章資料から知られるテオドロス・クリュセリオスの経歴は文官としてのそれに限られている。cf. J.-C. Cheynet, *Pouvoir et contestations*, p. 342, n. 26; J. Nesbitt - N. Oikonomides ed., *Catalogue of Byzantine Seals at Dumbarton Oaks and in the Fogg Museum of Arts*, vol. 3, Washington D. C., 1996, p. 121. 一方、パトリキオスのクリストフォロス・ピュルロスに関して、情報は乏しいが、11世紀末、皇帝アレクシオス1世コムネノスが、商業に従事する元老院議員に議員としての特権行使を禁じた有名な裁定に、当事者の一人としてアンテュバトスのテオフアネス・ピュルロスの名が登場していることから、この家系が商業活動と関わりが深かったことが推定される。同家は、11世紀半ば、皇帝の元老院開放政策によって社会的上昇を遂げた首都の大商人層に属したのかもしれない。cf. J. & P. Zepos, *Jus graeco-romanum*, vol. I, Athens, 1931, p. 645 f.

<sup>130</sup> Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 498; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 410.

<sup>131</sup> cf. V. Grumel, “Le patriarcat et les patriarches d'Antioche sous la seconde domination byzantine (969-1084)”, *Échos d'Orient*, 33, 1934, pp. 129-147, pp. 142-144.

<sup>132</sup> Michael Attaleiates, p. 58. 総主教に率いられた一団が、ここでは一種の臨時政権の体を成し、本来は皇帝の専権事項のはずの国家官職者の選任を行っていることに注目したい。

<sup>133</sup> Ioannes Skylitzes, ed., H. Thurn, p. 498; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, p. 410.

<sup>134</sup> Michael Attaleiates, p. 56.

<sup>135</sup> イサキオス・コムネノスの反乱勃発時、ミカエル6世と総主教は不仲だったことはプセルロスの記事から分かる。本稿の註100を参照。両者の不仲の原因をプセルロスは明言していないが、総主教と女帝テオドラが犬猿の不仲だったことはプセルロスが伝えており、テオドラ側近に擁立されたミカエル6世の政権に対しても、そうした関係が持ち越されていたものと思われる。Michael Psellos, éd., E. Renauld, II, p. 80f.

<sup>136</sup> 本稿の註41、43を参照。

<sup>137</sup> M. D. Spadaro, “La deposizione di Michele VI: Un episodio di <concordia discors> fra chiesa e militari?”, *Jahrbuch der österreichischen Byzantinistik*, 37, 1987, pp. 153-171, p. 161f. 他方、F.ティンネフェルトは、

総主教の意中の人物は、彼の甥のコンスタンティノスだった、と想定している。E. Tinnefeld, “Michael I. Kerullarios, Patriarch von Konstantinopel (1048-1058)”, S. 121. しかし、おそらく当時は若年であったはずの総主教の甥が叛徒の頂点に立つのは、いささか荷が重かったのは明白であろう。

<sup>138</sup> イサキオス・コムネノスの反乱時に総主教ミカエル・ケルラリオスが果たした役割に関しては、上記、スパダローの論文に加え、J.-C. Cheynet, “Le patriarche ‘tyrannos’: le cas Cérulaire”, in M. E. Fögen Hrsg. *Ordnung und Aufruhr im Mittelalter: Historische und Juristische Studien zur Rebellion*, Frankfurt am Main, 1995, pp. 1-16, pp. 6-12も参照のこと。

<sup>139</sup> M. D. Spadaro, “Interferenze politiche dei *δυντοί* laici e religiosi nel sec. XI (1041-1057)”, *Orpheus, N. S.*, 9, 1988, pp. 238-281, p. 267f et n. 86.

<sup>140</sup> P. de Lagarde, “Quae in codice Vaticano graeco 676 supersunt”, p. 184f; M. D. Spadaro, “Interferenze politiche dei *δυντοί* laici e religiosi nel sec. XI (1041-1057)”, pp. 270-272; J. Lefort, “Rhétorique et politique: Trois discours de Jean Mauropous en 1047”, p. 269.

<sup>141</sup> このあたりの経緯は、E. Tinnefeld, “Michael I. Kerullarios, Patriarch von Konstantinopel (1048-1058)”, S. 99-100に詳しい。